

42436

教科書文庫

4
810
42-1938
200030
1744

\$.13
1938

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

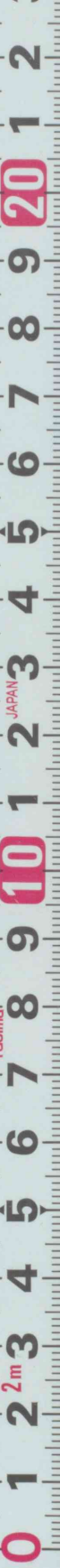
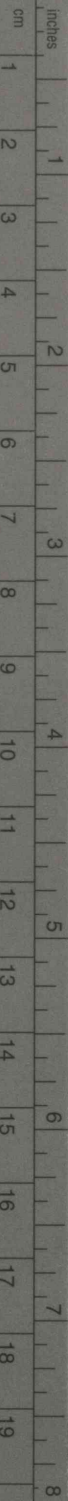


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
An4
資料室

新制女子國語讀本

新教授要目準據

卷三

370.9
A44

資料室

昭和三十一年一月二十六日
文部省檢定濟
高等女子學校國語科用

臺北帝國大學教授
安藤正次
東京
東條操共編

新制女子國語讀本
卷三

新教授要目準據

東京
大阪
三省堂



【筆水針中田】 籠 蟲

【照參課八十第】



卷三 目次

- 一 桃
- 二 花影の中に
- 三 小楠公(詩)
- 四 大和俗訓抄
- 五 土に親しめ
- 六 たんぼ
- 七 自然の音楽

- 島崎藤村 一
- 田山花袋 二
- 西條八十 七
- 貝原益軒 三
- 薄田泣菫 五
- 若山牧水 六
- 鈴木鼓村 七

目次

一

一	野の曲	橋南谿	一五
二	瀧の音	徳富蘇峰	一六
八	國歌の話	田邊尙雄	四
九	世界三都の印象	鶴見祐輔	五
一〇	味はひある生活	下田次郎	三
一一	オリンピック	廣瀬謙三	七
一二	山内一豊の妻	新井白石	七
一三	富士登山	荻原井泉水	八
一四	一樹の陰	海上龍子	一〇

一五	知らぬ火	橋南谿	一五
一六	涼み臺	吉村冬彦	二四
一七	我が家の富	徳富蘆花	二三
一八	蟲の音と秋草	高濱虚子	二六
一九	武藏野	國木田獨步	一四
二〇	箱根路	正岡子規	一四
二一	牛を追ふ話	五十嵐力	一五
二二	稗草の穂(短歌)	諸家	一六
二三	國風と家風	徳富蘇峰	一六

二四 トロロッコ

芥川龍之介 一六

— 目次 終 —



島崎藤村
名は春樹。詩人。
小説家。長野縣の
人。明治五年生。

新制女子國語讀本 卷三

一 桃

島崎藤村

三月の桃の節供は、五月の菖蒲の節供と共に、一年のうち
のあらゆる祭の日の中でも私達に特別の親しみを覺
えさせる。それは季節の感じが深いといふばかりでな
く、子供のための祝の日であるからでありませう。最早
この世に居ない身内の人達の形見として残つたやうな
古い雛などの取出されるのも、さういふ日だ。幼いもの

はその日を迎へて、自分等の生長を楽しみ、大人はその日を迎へて、自分等の少年時代をなつかしむ。白酒ひしもち、桃の花の掛物、三月の節供を祝ふもので、一としておとぎ話の情調を誘はないものはない。今にも合唱でも始めさうな雛、古風な少年音楽隊のやうな五人ばやし、そこにある一切のものがみな玩具だ。童話と童謡との世界のものばかりだ。あれは自分等の國にのみあるやうな子供の祭かも知れない。でも、優しい風俗だと思ふ。あの節供を祝ふ豆いりの種にも、紅と白があつて、桃のつぼみのやうに見えるのもよい。五月の菖蒲が、男の兒に適はしいやうに、桃の花は自ら

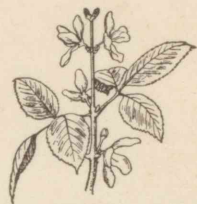
少女に適はしい。長い花房をうなだれ、花瓣の胸をひろげて、物思ひに沈んだやうな海棠のすがたは、到底少女のものではない。茶色でやゝ紅味を帯びた枝の素生に堅



桃の節句

くつけたあの桃の花の頸こそ少女のものだ。二尺にも三尺にも及ぶ程、勢ひ込んで延びて来て居るやうなその素生を見たばかりでも、生ひ

先こもる少女の生命を思はせるものがある。素朴にふくらんだところは、河柳の野趣に似て、もつと羞らひを含み、しかも處女らしい誇を見せて居るものは桃の蕾だ。



我が衣に云々
芭蕉の句。

長い冬を通り越して、黄梅・福壽草・連翹などの季節も過ぎ去り、梅には既に遅く、櫻にはまだ早いといふ頃に、桃の春が来る。ぽつ／＼暖かい雨がやつて来て、草の芽を延すころの楽しさは、何に譬へやうもない。長い冬の眠りから眼を覺して、また「生命」の蟲が這ひ出すのもその頃だ。一雨毎に春の來るやうな氣のするのもその頃だ。全く桃の花の楽しさは、櫻や牡丹のやうに私達を酔はしてしまはないで、寧ろ春先の蘇生の思ひを與へるやうなところから來る。冷たく無關心になつてしまつた私達の心を温めて、少女の春を思はせるやうなところから來る。

我が衣に伏見の桃の雫せよ

任口上人
伏見西岸寺の僧。
貞享二年(三四五)
歿。

李鴻章
清國の直隸總督兼
北洋大臣。光緒二
十七年(西紀一八七
〇)
歿。

桃に寄せて、こんなやさしい感情をいひあらはして見せた昔の人すらもある。桃のしづくは果してどんな衣を染めたらう。これは可憐な婦人の身につける襦袢の袖にでもうつりさうなものである。ところがこの處女のやうな感情は伏見の西岸寺といふところで、任口上人といふ人に會つた時の、昔の詩人の心胸から溢れて來て居るのだからゆかしい。

かつて遠い船旅に上つて、上海の港に寄つたことがあつた。古河公司の人に案内されて、佛蘭西租界の方まで辻馬車を驅り、支那風な庭園で知られた愚園といふところにもしばらく時を送り、それから李鴻章の故廟の跡を

訪ねた。革命後の民國には、李鴻章の銅像も用のない遺物のやうに、小高い築山の上に引倒してあつた。一代の榮華は見る影もない。そこいらの廢れた庭園の有様は、まるで夢の跡だつた。たゞ故廟の建築物などに、在りし日の面影をとゞめて居た。その建築物も學校に代用されて居るとかで、支那風な瓦屋根や特色のある窓や、白壁などが昔を語り顔にそこに残つて居た。そんな破壊の動いて行つた跡にも、紅い桃の花の今を盛りと廢園の一隅に咲き出て居るのが眼についた。あの桃の花ほど上海での旅の感じを深くさせたものはなかつた。

支那より西の方の桃のことは知らない。マルセイユ

マルセイユ

佛蘭西南部の港市
リヨン灣に臨む。

リモージュ
佛蘭西中部の都會。

の港は地中海に沿うたところで、氣候も我が國と大差のないやうに思はれたが、その植物園にも桃は見かけなかつた。春が來て、巴里の街路にマロニエの花が咲く毎に、在留する美術家などと連れ立つては、あの都の郊外へよく出掛けたものだ。併し、櫻桃のそこゝに咲いたのはよく眼についたが、三年の旅の間、つひぞ桃の花を見かけなかつた。佛蘭西中部のリモージュまで旅して行つた時に桃の木を見たやうな氣もするが、それもはつきりしたことはない。今でも私はあの果樹の多い佛蘭西の田舎家の裏庭を、そこに熟しかけて居た佛蘭西風の青い梨を、あり／＼と胸に

浮かべることは出来る。それほど梨の記憶はあるが、どうも桃のことは残つて居ない。桃は、殊にその花を愛することは、全く東洋の方の趣味のやうな心持もする。よし佛蘭西あたりの田舎にあるとしても、自分等の國に見ると同じやうな花から、あの春の焔が流れて来るやうなものがどうかは、ちよつと想像がつかない。桃は葉も好ましい。あの細長い葉の尖つたのは、何ともいつて見やうのない生氣を感じさせる。茂り重なつた葉の間に、小さな珠のやうな青い實をつける頃もよい。氣のあつた友達とでも連れ立つて、やゝ疲れた時に、小鳥の囀る聲でも聞きながら、靜かに歩いて見

たいのは、桃の葉かげだ。

桃で思ひ出した。信州の山の上にある守山といふところは、佐久地方でも桃畑で知られて居る。小諸からあの守山までの道にはいゝ木陰もあつて、日歸りにそこを歩いた時のことも忘れられない。青い桃の葉をかぎ、枝に熟した水蜜桃の香氣をかぎ廻つた後でもぎたての果實からしづくの滴るやうなのを、桃畑の中の小屋で味はつた時のことも忘れられない。

(藤村女子讀本)

佐久地方
長野縣北佐久郡
小諸
同郡小諸町。

田山花袋
名は録彌。小説家。
群馬縣の人。昭和
五年歿。年六十。

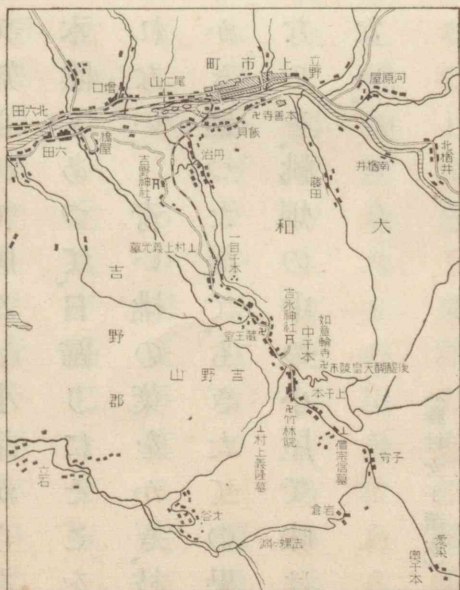
六田
奈良縣吉野郡吉野
村の字。

柳の渡し
北六田と吉野村六
田との間の渡し。

二 花影の中に

田山花袋

金剛山を越えて、吉野の六田の渡しを渡つたのは、その日の午後四時少し過ぎた頃であつたが、途中、花を挿して歸つて來る人に聞いて見ると、花は今眞盛りで、今日早くても遅くても、満開を見る事は出來ないとの話であつた。漸く六田の柳の渡しのほとりに來た頃は、夕日



沈まう
吉野川
紀の川の上流。

がもう彼方の山の凹處に沈まうとして、清い速い吉野川の流は、きら／＼と美しい波紋を川の面に描いて居た。自分は船が前岸に着くと、そのまゝ急いで飛びおりて、一直線にその懐かしい吉野山へと志した。街のはづれに一つの黒い門があつて、こゝから奥の院まで六十町餘りと書いた札が立つてゐるが、それをくゞると、もう山で、櫻の花が段々路の兩側に見え出して來る。入口は盛りが過ぎて、花びらの枝に残つて居るのも極めて少いが、次第に登れば登るほど、花は眞盛りであつて、四邊の眺望の美しさは、殆ど言葉にも筆にも盡くす事が出來ないほどである。右手には、越えて來た金剛山が偉丈

聳えて

十津川
熊野川の上流。

夫の端坐してゐるやうに聳えてゐて、それを仰ぐと、護良親王が十津川からこの地に入つて、千早・赤坂と共に三足鼎立の勢を作らせ給うた時の事などが、すぐ胸をついて浮かんで来る。

両側の花はいよ／＼美しい。自分は行く／＼右と左との大澤を見おろしながら、夕日の花やかな光のぼつと谷間々々の桜花の上に匂ひ混るのを見て、獨りつく／＼とこの山の景のいかに懐古の情を起すに適して居るかを思つた。花も好い、境も好い、山も面白い。けれども吉野朝の遺跡が無かつたら、決してこれほどの感興を起す事はなかつたらう。

村上彦四郎

護良親王に従つて
十津川より吉野に
入り、元弘三年
(一九三)親王に代つ
て戦死した。

片岡八郎

護良親王に従つ
て、元弘二年(九
三)十津川玉置山で
戦死した。

玉置山

奈良縣吉野郡十津
川村にある。

村上彦四郎よし義光てるの墓の前にひざまづいた時は、自分は

何とも知れぬ懐古の感に打たれて、暫しはそこを立去る事が出来なかつた。前には片岡八郎があつて、親王の難を玉置山に救ひまゐらせ、後にはこの彦四郎義光があつて、身を以てこの吉野の遁口を安全に守りまゐらせたのであるが、若し後年に至るまで、この忠勇無二の義光が生きて居たならば、親王は決して鎌倉に於てはかない最後を遂げさせ給ふやうな事はなく、或は吉野朝の衰へたのを恢復する事が出来たかも知れない。つたないのは吉野朝の運命である。

この時である。自分の立つて居る傍を、一群の醉客が

恢復—回復

憤填噴

踏々跟々として歩いて来たが、卑しい歌を唱ひながら、遠慮もなしに、自分の肩をかすめるやうにして過ぎて行つた。自分はすでにこの山に登つた時から、心もない花見客のわい／＼と酒に酔つて歩くさまを、非常に快からず思つてゐたが、今は丁度自分の心が無限の感慨に打たれてゐる時の事として、一層深く憤慨して、一つ罵倒してやらうかと思ふほど癢に障つた。

けれども、花の穏やかに咲き匂つてゐる間を、一步二歩とたどつて行くと、その癢に障つた念は一種深い／＼悲哀の情に變つて、どうにもかうにもたまらないやうな心地になつて、涙がはらく／＼とやつれ果てた旅の衣の袖を

傳はつて落ちた。そして草莽の孤臣といふ感が胸も狭しと溢れて来て、自分も若しその時代に生まれたならば、たとひ雑兵となつても、この勤王の志を致したであらうにと思つた。

そこから吉野の山奥までは五十町、自分はこの間を、どんな感慨と、どんな涙とを以て行き過ぎたであらうか。護良親王の奮戦した藏王権現堂の高く櫻花の上に聳えて居るのを仰いでは、どんなに烈しい懐古の情に打たれたであらうか。吉水院の行在所のあとを尋ねては、どんなに深い暗涙に咽んだであらうか。

こゝで、この花の中で、後醍醐天皇は劍を按じておかく

藏王権現堂

役小角の開基。金峯山寺の本堂。

吉水院

元は金峯山寺の僧坊。明治九年吉水神社と改め、後醍醐天皇を祀る。

歌
「返らじとかねて思
へば梓弓しき數に
いる名をぞとむ
る。」

れなされたのである。こゝで楠木正行は歌を扉の上に
残し、死を決して敵軍に向つたのである。こゝで吉野朝
五十年の帝業は建てられて、正義といふ精神は赫々とし
て光を日月と争つたのである。そしてその六百年前の
夢のあとは、今もなほ美しい満山の花影の中に、微かに匂
ふばかりに残つてゐるではないか。

これほど美しい詩があらうかと、自分は幾度も思つた。
自分がかういふ風にこの吉野朝の遺跡を處々に見て、一
層深くこれに對する同情の念を増したが、翌日吉野山を
下る時には、幾度となく振返つて、殆ど別れ難い思ひがし
た。

(花袋紀行集)

西條八十
詩人。早稻田大學
教授。東京市の人。
明治二十五年生。

三 小 楠 公

西 條 八 十

父の遺訓を畏みて

河内に籠る十餘年

薰忘れぬ楠木の

若葉に春は來りけり。

黒雲四方に蔓りて

天日晦き世の相、

我いまにして起たずんば

我が日本をいかにせん。

残んの雪を踏み分けて
詣づ吉野の行在所、
破れし御簾を仰ぐだに
鎧にかかる涙かな。

「汝こそ朕が股肱なれ、
みだりに死をば急くなよ。
額を土に埋めつつ
うけし御誕ぞ有難き。」

さらば最後と正行が
かねて覺悟の梓弓、
如意輪堂の板壁に
亡き數にいる武士の、

名をば刻みて見はるかす
四條畷の廣野原、
明日流さん血にも似て
紅燃ゆる夕陽かな。

貝原益軒 別號損軒。名は篤信。儒者。博物學者。筑前國(福岡縣)の人。正徳四年(一七二四)歿、年八十五。

禹王 支那夏の國王。支那上代の聖王と稱せられた。

四 大和俗訓抄

貝原益軒



貝原益軒

およそ幼よりつとめまなぶに、暇を惜しむべし。古の禹王は、聖人なりしだに、なほ寸陰を惜しみ給ふ。況や今の凡人をや。徒に悠々として、空しく時日を費すべからず。光陰箭の如く、時節は流るゝが如くなれば、年若きを頼んで、時を失ふべからず。人の世にあるは、老幼の時と、病ひする時とは、學びがたし。又四民共に、その家のことわざしげくして、もの學ぶ暇は少し。その

常にして云々 支那漢代劉向の説 宛にある。

少き暇を惜しまず、怠りて空しく過ぎ、或は無益のことをなして、時を費し、一生をはかなく終らんこと、いと愚かなりといふべし。今年の今日、ふたゝび得がたきことを思ひて、かりにも徒に時をわたるべからず。これ一生の間、心を用ふべきことなり。古人も、「常にして措かず、つねに行ひてやまざる者には及びがたし。」といへり。又「徒に爲すことなく、常に暇多き人は、人にすぐるゝことはなきものなり。」といへり。たとへば農人、商人の、つとめて暇を惜しみ、朝夕田を作り、あきなふ者は、必ず人にすぐれて、その家富みて、衣食乏しからず、古人も「人生はつとめにあり。つとむれば則ちまどしからず。」といへり。國家の

政をくはしくつとむれば、その國家必ず治まる。學問をくはしくつとむれば、必ず諸人にすぐれて、その才すゝむ萬よろのこと皆然り。暇を惜しみて久しくつとむれば、成就せざることなし。それ人の實は暇に過ぎたるはなし。いかなとなれば、君子の學問をつとめ、國家の政を行ひ、父母主君に仕へ、諸藝をまなび、農の田を作り、商人のひきぎ、百工の器物を作り、婦女の布帛をおりぬふも、皆暇を用ひてなし出すわざなれば、人の最も重んじ惜しむべきこと、暇に過ぎたるはなし。故にその惜しむべきこと、金玉にも過ぎたり。古語にも、聖人は尺璧を貴ばずして寸陰を貴ぶ。といへり。

聖人は云々
淮南子といふ書に
ある。

人に交はるに愛敬の二を心法とす。これ肝要のことなり。誰も知らずんばあるべからず。愛とは人をあはれむを云ふ。惡まざるなり。敬とは人をうやまふを云ふ。侮らざるなり。人をあはれむは仁なり。人を敬ふは禮なり。仁禮を心の内にたもちて、人をあはれみ、人をうやまふこと忘るべからず。これ人に對して行ふべき善なり。父母をあはれみ、主君をうやまふは、いふに及ばず、うとき人、賤しき人に對すとも、その位にしたがひて、よきほどに愛敬すべし。侮りおろそかにすべからず。これ人に交はる道なり。

我が身をへりくだり、人にたかぶらざるを謙といふ。謙なれば我が身に誇らず、人にくだりて問ふことを好み、人の諫を聞きて我が過を改むる故、智をひらき善にうつることきはまりなし。この故に、古人謙を以て天下の美德とす。謙のうらは矜なり。矜はほこるとよむ。ほこるとは我が身に自慢するを云ふ。ほこれば自ら是として人に求めず。かくの如くなれば、悪にうつることきはまりなし。この故に、古人矜を以て天下の悪事とす。

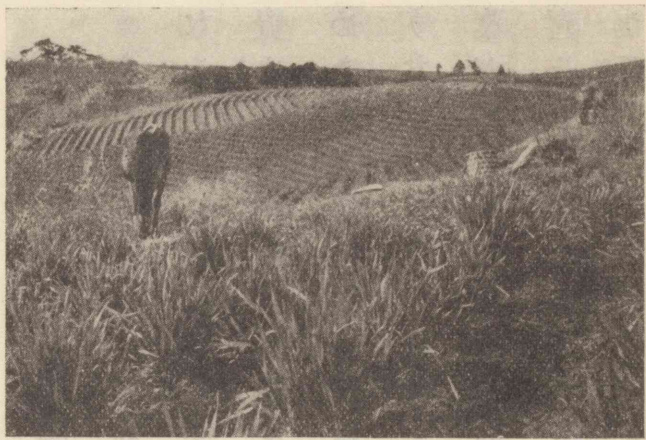
(益軒十訓)

薄田泣菫
名は淳介。詩人。
文學者。岡山縣の
人。明治十年生。

五 土に親しめ

薄田泣菫

われらはまたも太陽を取りもどした。
大空の高みから金粉をふり撒いたやうなその光が、下なる大地に氾濫して來る時、草木は急に昨日の睡眠より覺め、しなやかな諸手を伸べて、輕々大氣の中に躍りさゞめき、小鳥は花樹の梢に飛び交はしながら、玉を轉ばすやうなうつくしい歌曲に謠ひ耽つてゐる。原つばには、青葉が房やかに萌えてゐる中で、仔牛や仔馬がさながら歡喜そのものの精でもあるかのやうに、身輕に跳舞し、また勇躍する。海にはまた、油のやうな春の潮が、きら／＼



いにしへの詩人のやうに謙遜な心を持つて、眼前に暫くの間もじつとしてはないこの生々の氣の動きを、歩

と輝きながら、ひねもすのたりのたりと揺れ動いてゐる。いづれを振り向いても、大地は潑刺たる生氣が充ち溢れて、老いてなほとこしへに若い「大自然」が、生々化育の大事業のいたらぬくまもない有様だ。かうした季節に際會して、われらは先づ何をなすべきであらうか。

みを凝視し、靜觀し、また讚嘆するのもあながち悪くはなからう。しかしそれよりもつと好いのは、自ら手を下して土に親しむことなのだ。

北歐のある文人は、自分のポケットにいつもいろ／＼の花の種子を入れておき、到るところでそれを撒き散らし、て歩いたといふことだが、草木は種子をばら撒いただけでは、立派な生長を遂げるものではない。それには種子を播くものが自ら土を耕し、培ひ、また水を灌ぎなどして、わが手の泥土に汚されるを厭はず、面倒を見てやるだけの用意がなくては叶はない。われらが播種し、もしくは移植した草木が、大地の生々

の氣に刺激せられ、化育せられて、草は草として、木は木としての生命の發展を遂げゆくを見て、言語に言ひつくしがたい、甚深な感激と歡喜とに先づ心を躍らせる者は、誰よりも土に親しみ、手を汚してまでも種子を播いたもの、彼自らでなければならぬ。

あの磯濱の砂粒にもたとふべき小さな種子にもせよ、その生命をいたはり、はぐくみ育て、朝に夕に、その伸びゆく姿を見るほど世の中に心清くも、頼もしく、また愛を感じさせられるものはないからである。

(獨樂園)

六 たんぼ

若山 牧水

若山牧水
名は繁。歌人。宮崎縣の人。昭和三年歿。年四十四。

北原白秋

名は隆吉。詩人。歌人。福岡縣の人。明治十八年生。

廢れたる園に踏みいりたんぼの白きを踏めば
春たけにける 北原白秋

何といふ上品な美しい歌であらう。

つと、とある庭園に足を踏みいれると、そこら一面たんぼが咲き亂れてゐる。その花を踏みつゝ立つてゐると、嗚呼、もう春も暮れるのだといふ、暮春の感じが油然として胸の底から湧き上つて來るといふのである。まことに、言葉に一分のたるみもない。「踏みいり」などといふのも、決して不用意に使はれたものではない。單に「入りゆき」などといふのでなく、「踏みいり」とあるので、そ

の時の作者の心が何かしら興奮して、いらくくしてゐたらしく感ぜられる。「白きを踏めば春たけにける」といふのでも、そのやゝ硬い古風な言ひかたの中に、言ひ知れぬ緊張と、しいんとした氣持とが含まれてゐるではないか。

いつしかに春の名残となりにけり昆布乾場のた
んぼゝの花

ある海邊にての作。

ぶらくくと散歩の途か何かにとある荒磯の昆布乾場に出た。ふと見ると、そこらに一つ二つたんぼゝの花が咲いてゐる。「おゝ、もういつか、これが春のなごりとなつ

たのかなあ。」といふ意味であらう。単純な歌ではあるが、これなどは最も私の愛誦する一首である。昆布の採れるところといへば、どうせ荒磯である。その乾場は砂の上か、岩の上か、いづれにせよ、とげくしい荒砂か、眞黒な岩の上かと見てよからう。その時、昆布が干してあつたか如何かはとにかく、いづれ昆布の切れや、貝殻などがそこらに散亂してゐたに相違ない。渚にはかなりな浪が絶えず碎けて居り、霞みながらも、沖の方には大きなうねりが動いてゐる。其處へぼんやりと立入つて見ると、これはまた思ひがけなく、黄色い花が砂をあびて、其處此處に咲いてゐる。過ぎ去つた春を思ふ心に燃えてゐる

眼に、その二三の可憐な花が、どんなに強く映つたことであらう。

病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし

畑の黄なる月の出

畑には青い幹と葉とを思ふさま生ひ伸して、蜀黍が高と茂り合つてゐる。夏の初の静かな夕方で、その葉先にはもう露でも宿りさうだ。折しも月はこの廣漠たる平原のはての低い空に、漸く黄な色を鮮やかにして照りそめようとしてゐる。其處に一人の少年が佇んでゐる。手足の細い、色の青白い病兒である。晝間からたつた一

人で、しきりに細々とハモニカを吹き鳴らしてゐたのであつたが、もう夜にならうとするのに、一向氣もつかぬげに、猶しんみりと幼い單調な樂器を唇頭から離さうともしないといふ敍景の歌。同じことでも、たつぷりと新味を湛へて歌つてある。

石がけに子ども七人腰かけて河豚を釣り居り夕

やけ小やけ

「夕焼小焼」は、よく子供たちが夕焼のした時に唄ふ歌である。それをそのまま持つて來てゐるのだが、それがいかにもよく調和してゐて、わざとらしくないばかりか、そ

の句があるために、夕焼小焼のした海邊の崖に、多くの子供が一心になつて魚を釣つてゐる景色が、はつきり水の滴るやうに歌ひ出されてゐる。

この日頃ひそかに胸にやどりたる悔いあり我を

笑はしめざり 石川 啄木

事々しく取出して言ふ程のことでもないが、此の頃、自分の心の奥には、人知れず氣にかゝつてゐて離れない一つの悔いがある。あゝせねば善かつた、あれは全く自分が悪かつたと思ふ。それが事につけ、折にふれ、絶えず氣がかりになつて、今は氣輕に笑ふことをすら許されなく

石川啄木
名は一。歌人。岩手縣の人。明治四十五年歿、年二十七。

なつたといふのである。かうしたことは、誰にでもよくある事である。大概の人は、かういふ時には、自分で自分の心を瞞着して、或は無雜作に打忘れて、その悔いを悔いとせずに通してしまふ。併し、此の作者はさうではなかつた。自己に對して何處までも眞面目な作者の性格は、此處にも窺はれるであらう。

新しきからだを欲しと思ひけり手術の傷のあと
を撫でつゝ

此の歌は、啄木が晩年に腹膜炎で切開手術を受けた後の作で、意味は説明するまでもなく明らかで、眞に何氣な

い風に歌つてあるが、生まれもつかぬ傷痕をもつ人の痛ましい心がよく表れて居る。其の「新しきからだを欲し」と歌ひ出して、「傷の痕を撫でつ」としみぐとした姿を描いてゐるのに注意しなければならぬ。又、この歌では單に肉體の傷であるが、心に傷を負うた場合にも、人はやはりこのやうな感を抱かずには居られないだらう。さういふ風にして見ると、この歌にはなかく深い味はひがある。

土岐哀果
 名は善麿。歌人。
 東京朝日新聞記者。東京市の人。
 明治十八年生。

自分としては極めて珍しいこの平靜な心には、平生聞き馴れてゐる時計の音までが如何にも興味深く聞きなされるといふのである。この歌を味はふと、深い大洋の底に、一尾の魚が靜かに尾鰭を収めてじいつとしてゐるかのやうな、靜かな懐かしい印象を受ける。さうして、かうした場合にあつた作者を想像することによつて、我等はおのづと我みづからを懐かしむ心の涌いて來るのを覺える。

や、朝鮮服が立つて居り白くぼんやりとあさの
 みなとに

釜山
朝鮮全羅南道釜山府。下關との間に連絡船がある。

かうした調子の歌は珍しい。朝鮮海峽を夜の間に渡つて、ほどなく釜山に上陸しようといふので、夜の引明けの甲板に出て舳の方を眺めて立つて居ると、次第に港は近づいて来る。その港の岸に「や、や、居たぞ、朝鮮服が。」といふのである。嚴密に言へば、三十一文字になつてゐないが、自然に出て來た聲の調子の中に却つてそれよりもよく調つた節奏がある。

(和歌講話)

七 自然の音楽

鈴木 鼓村

一 野の曲

翠濃い丘陵の際に、巨刹の屋根が見えて、揚雲雀の高く囀る日であつた。川尻のせむらぐ汀に、里の子が根芹を摘んでゐるいさゝ小川の土橋を渡つて、日の光もさゝない藪の中を出かゝると、十戸にも足らぬ草屋が立並んで、野仕事の間の午下りが朝の如く静かである。

梨・杏などの木立を隔てて、直徑丈にも餘る水車が軋つてゐる。山吹・木蓮の陰から箴をさの響も傳はつて來る。鶏が一聲長閑に鳴き渡ると、椿の花がぼとりと落ちる。桃

鈴木鼓村
名は映雄。音楽及び音楽史の研究家。宮城縣の人。昭和六年歿、年五十七。

の陰に牛が鳴く。その間、正しい拍子と長閑な旋律とを以て、ひっそりとした裡に趣ある曲が繰り返される。春の香のしみ入るやうな若草の中にうづくまつて、暫しこの音に聴き入った。

折から、雷の様な轟きが漸く近づいて、汽車は土手の上を走る。蜿蜒たる列車は長い煙を吐いて過ぎた。暫く破られた幽玄の曲がまた聞かれる。

瀑の音を現した句で、自分の氣に入つてゐるのは、

あら瀑や満山の若葉皆振ふ

と云ふ漱石の句である。如何にも軽鬆たる瀑の音を聞

二 瀑の音

くやうで、一種雄大な感に打たれる。



しつとりした若葉の匂が鼻に満ちて来る。汗ばんだ肌も冷りとするので、もう瀑に近づいたな。」と思ふと、どうつと雷のやうな音を連続させて、それが木立や巖石の疎密の加減で、強く聞えたり、また少し弱くなつたりして居

初裕の
軽い旅姿
で、喘ぎ喘
ぎ細い徑
でも上つ
て行くと、

八沙
つじの一種。
うだんつじ。

芭蕉
姓は松尾、名は宗房。俳人。伊賀國(三重縣)の人。元禄七年(三五)歿、年五十一。

瓣-辯-辨

るうちに、さつと薄い霧が面を拂つて、つひ數歩前に、見上げる白簾が現れ、巖に激して凄じい響を立てる。そのあたるの青葉若葉は揺ぐばかりである。崖の上には赤い躑躅が照つてゐる。薄紅の八沙の花が翠巒の中にぽりぽつりと模様のやうに咲いてゐる。

こんな光景が自ら想ひ起される。

おなじ瀑の音でも、何處か閑寂な感じのするのは、彼の

芭蕉翁の、

ほろくくと山吹散るか瀑の音

といふ句である。

春が段々闌けて、山吹の花は瓣の端が白くなつて、風も

ないのにほろくと散る。其處らに、餘り大きくない瀑があつて不斷の響を傳へてゐる。その裾には水車もあらう、杉の林もあらう。日は麗らかに照つて、背中がぽかぽかするので、路傍の石に腰をかけてゐると、雉子が向ふの山際で一聲朗らかに鳴く。またしても山吹がほろほろと散る。瀑は同じ調子で響いて居る。

翁の句はこんな境を聯想させる。

(耳の趣味)

田邊尙雄
音樂理論家。國學
院大學教授。大阪
市の人。明治十年
生。

八國歌の話

田邊 尙 雄

一國の音樂がどれ程その國の人情に左右されるかといふ事は、國歌などを見ると最もよく分る。實に國歌の比較は、一面には國々の國體を比較する事にもなり、またその國民の氣風性質などを知る便りともなる。今試みに西洋の三大音樂國と言はれてゐるイタリー・フランス・ドイツ三國に就いて、その國歌を較べてみよう。最初先づフランスの國歌「マルセイエイズ曲」に就いて考へてみると、これには貴族的好尚に對する反抗が表れてゐて、甚だしく平民的傾向を帯びてゐる。随つて國歌

の上には尊嚴といふものがない。その代り感情は實に遺憾なく表れてゐる。一體感情を極端に表すといふ事が、フランス音樂の一つの特徴となつてゐるのであるが、この國歌には、殊にそれが著しい。この意味でマルセイエイズ曲は、眞にフランス人民を代表する國歌としてふさはしいものである。

次にドイツの國歌を見ると、これは全くフランスの反對である。ドイツ國民は頗る剽悍勇猛であると同時に、また理性が明らかで、徒らに感情に走らない。随つて感情中心のフランス音樂などとは大いに違つてゐる。この國には古來愛國的歌謠が頗る多いが、その愛國心とい

ドイツの國歌
舊帝政時代のドイツの國歌をいふ。

ラインの守
 「聲は雷の如く、劍の響と波の音とに交りて、聞ゆ、ラインよ、ラインよ、この河の防禦よ、この河の防禦よ、誰ぞ安んぜよ、愛する祖國よ、ライン河の守は立てり、堅固に且忠實に。」

ふのが、また我が國や、イギリス、ロシヤなどと甚だ違つてゐる。我が國は全然皇室中心主義であつて、愛國といふ事は、即ち皇室を尊重する事である。然るにドイツの愛國は、自國が他國に對して戰勝を得る事を喜ぶといふだけの思想から起つた愛國心である。随つて國歌には、我が國の様に皇室尊崇などといふよりは、他國に對する示威を旨としてゐる様な趣が認められる。この點がドイツ國歌の特徴である。それは準國歌たる「ラインの守」及び同じく準國歌たる「ドイツ人の祖國やいづこ。」を見るによく分る。斯様にドイツの國歌とフランスの國歌とを比較すると、ドイツのが示威的であるのに反して、フ

祖國やいづこ
 「ドイツ人の祖國やいづこ。プロシヤか。ぶだうの實のラインの岸か。かもめの泳ぐバルチックの濱か。不、否、我が國は更に大なるべし。」

ンスのは反抗的である。ドイツのが理性的であるのに反して、フランスのは感情的である。實にこの兩國の國歌を見ただけで、かの歐洲大戦争の光景が、目に見える様に感じられる。

翻つてイタリーはどうであるか。普通イタリーの國歌と言へば、「ロイヤルマーチ、オブリタリー」と稱せられる軍歌風の行進曲であつて、歌ではない。これはなかなか面白く、愉快に出來てはゐるが、尊嚴といふ感じは少い。餘りに巧に作り過ぎてあつて、國民の眞情が流露してゐない。これは全くこの國の歴史に因るものである。イタリーが現今の様に統一されて帝國となつたのは、今か

七十年程前
西紀一八六一年

ら僅か七十年程前であつて、その時から始めて國家といふ觀念が急に勃興し、隨つて愛國の歌謠も現れて來た。國歌のロイヤルマーチはこの時に生じたのである。けれども元來永い間の精神修養に依つて出來た愛國心ではなくて、歴史上の變動の爲に急に現れて來たものであるから、どうも國民の眞情が流露してゐない憾がある。且またイタリーでは從來音樂が頗る發達して、作曲法の技も進んでゐたものだから、國歌が内容よりも寧ろ形式に流れてしまつて、國歌としては餘りに曲を飾り過ぎてしまつたのである。

さて日本の國歌はどうであらうか。「君が代」は宮内省

林廣守
元宮内省雅樂部副
長。明治二十九年
歿、年六十六。

雅樂部の林廣守の作曲で、割合に新しいものであるに拘らず、イタリーのとは大いにその性質を異にしてゐて、非常に尊嚴なものである。今日我が國の國旗なる旭日の



林廣守

意匠と、國歌なる「君が代」の旋律とは、確かに世界に對して我が國の威嚴を示す表徴となつてゐると言つてよい。「君が代」の作曲は一度外國人が手を着けたけれども、不成功に終つた。その後、林氏が全然古代の雅樂に則つて作られたのが現今の「君が代」である。我が國

の國歌が、かゝる宮中の雅樂師、しかもその老輩の手に成

つたといふのは、ちよつと異様

であるが、實はそれが我が國の

大幸福であつたのである。

一體我が國上代の音樂は、眞

に大和民族の眞情を流露した

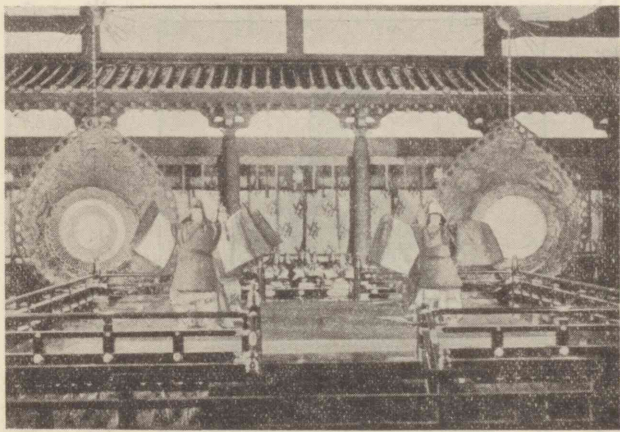
音樂である。かの神武天皇御

作の久米歌に依つて作られた

久米舞などは、いかにも雄大且

莊嚴なもので、これを宮中の饗

宴に於て拜する外國の使臣は、皆その結構の偉いのに驚



久米舞

歎するといふ事である。斯様に大和民族本來の特性を失はずに、それに最もふさはしい形式の備つた音樂が、いはゆる雅樂である。さうしてこれを大體保留して傳へてゐた宮中の雅樂師が、君が代を作曲したのであるから、それが大和民族本來の性情を具へてゐて、しかも、形式に於て可なり立派なものであるといふのは、當然な事である。

鶴見祐輔
政治家。群馬縣の
人。明治十八年生。

九 世界三都の印象

鶴見 祐 輔

フランス人は勤勉な國民である。イギリス人も勤勉な國民である。併し、其の勤勉さには相違があるやうに思はれる。勤勉それ自身に本質的の差がある譯はないけれども、英佛人の勤勉性の差は、單に外形的・形式的相違だけには止まらぬやうである。それは兩國民の國民性の相違から生ずるのではあるまいか。然らば、其の國民性は如何に相違して居るだらう。こんなことを考へながら、私は一人で能くパリの公園を歩いてゐた。さうして、これにアメリカを今一つ加へて、能く三國の國民性を

比較して見た。

三國の特色は其の大都會に於て著しく眼に着く。それは都會は其の國の國民性を最も鮮やかに映し出して居るからである。多くの人はニューヨークはあまり歐洲化して居ると言ふが、併し、ニューヨークに一日居ると、我々はアメリカの大空氣が全身に躍動するのを意識せずには居られない。ニューヨークはやはり米國である。さうして、ロンドンには英國であり、パリは佛國である。——恰も東京が日本であるやうに。話はまた英佛人の勤勉性に還る。朝早くパリの街を歩くと、石の舗道の上にはもう綺麗に打水がしてある。

凱旋門のあたりの廣場には、花賣の露臺が幾つともなく立並んで、新聞賣の小舎とともに、心地よい朝の活動を象徴して居る。黒い質素な着物を着た女たちが、耳に快いフランス語で笑ひ興じながら、忙しげに花に水を灑いだりして居る。

ロンドンの下町に晝頃行くと、狭い側道の上に、商館や銀行などの事務員かと思える若者が、帽子も冠らずに、何百人となく忙しげに往來して居る。私は此の群の中を縫ふやうにして歩きながら、遠いアフリカや印度の貿易を机の上でやつて居る此の人々の日常生活を考へた。さうして、フランス人とは種類の違ふ此の人々の勤勉さ

クールヴァン
フランスの女流小
説家(一九一五)

をも考へた。こんな時には、何時もフランスの小説家クールヴァンの言葉が腦裡に閃いた。「佛國人は蜜蜂のやうに勤勉に、英國人は蟻のやうに精勵である。」と。パリとロンドンとの生活を見て居る内に、此の言葉の深い意味が、日一日と自分の頭腦に深く沁みて行つた。晴れ渡つた初夏の日盛りに、寸刻の隙もなく、花から花へ蜜を求めて翔つて行く可憐な蜜蜂の勤勉が、如何にも能く佛國人の朝起の心持を現して居るやうに思はれた。さうして、來るべき冬の支度のため、營々として重い餌を引摺つて行く健氣な蟻の精根が、如何にも能く英國人の勤勉を現して居るやうに思はれた。

観音堂
東京市浅草公園に
ある金龍山浅草
寺。

阿鼻叫喚
地獄。

それならば、米國人のあのいらくした忙しさは何に
喩へられようかと考へて見た。私の頭の中に、ふと浅草
の観音堂の鳩が浮かんで來た。いつ行つて見ても、大勢
の人込の中で、幾十百羽の鳩が、我劣らじと押しあひへし
あひ、地上の豆を拾つて居る。物音に脅かされて飛び立
たうと、半分氣を外に配りながら、それでも眼前の豆粒は
一つでも餘計に食べようと、眼の色を變へて何時までも
餌を拾つて居る。米國人の勤勉は正に此の鳩のやうに
餘裕がないと、私には考へられた。

朝の出勤時間頃に、ニューヨークの地下鐵道に乗る人々
は、これが此の世ながらの阿鼻叫喚あびけうくわんではないかと思はれ

るやうな雑沓を目撃する。或日、私は汽車の切符を買ひ
に市内營業所まで行つた。大勢の客が群集してゐた。
係の若い米國人が、私の行先と列車とを聞き取り、頓て右
手の袖を一寸捲まくり上げて、鉛筆持つ其の手を切符の紙の
上で左右に五六回激しく振つた。何をするのかと呆氣
に取られて見て居ると、忽ちかつと手を紙の上に落して、
するくくと切符の文字を眼の廻るやうな早さで書き終
へた。只今手を振つたのは、結局手に運轉を附ける爲だ
つた。私は噴き出すやうな可笑しさを感じた。何もさ
う手に運轉を附けないでも、大して時間に相違もなく字
が書けようし、また運轉を附ける時間だけ無益のやうな

気がした。

其の翌年、私は英國の商務院の鐵道局に、賃金引上の一覽表を貰ひに行つた。すると係の若い英國紳士が、「たしか此の机の中に一枚だけ統計表を入れて置いたはずだ」と言つて、自分の机の抽出を開けた。私は見るともなく其の抽出の中を覗き込んで見て驚いた。まあ、何といふ多數の書類だらう、累々と種々な紙片が堆積されて居る。それを件の若い紳士は手を突つ込んでがさ／＼と掻き廻して、「此處にはない。」と言つて、次の抽出、また其の次の抽出を開け、さうして、最後の抽出の底から、やつと賃金表を見附け出した。「これは差上げるわけに行かないから、

此處で見て下さい。」と言ふから、一度見ただけでは逆も覺えられませんね。」と答へると、ちよつと當惑して、「それでは私が寫してあげませう。」と言つて、それを別の白紙に筆寫し始めた。ニューヨークならば、傍に居る若い女のタイプストに命じて、一分間内に寫させるところであるが、件の若い紳士は、先づ自分の机の上の大きな吸取紙の上に原本の統計表を置いて、其の上に白紙を當てて書き出した。私はちよつと面喰らつた形で、此の異様な淨寫法を見てゐた。すると、彼は白紙の上に數字を一行書いた。さうして、今度は其の白紙を左手で持上げて、下の原本を覗いて次の行の數字を諸記して、また白紙を其の上

にべたりと置いて、諳記しただけを書いて、また前のやうに紙を持上げて原本を覗き、また其の上に重ねて書いた。不思議な遣り方だと見て居ると、やがて書き終へた。インキが乾いてゐない。そこで、今度は其の紙と原本と二枚持上げて、下敷になつて居る吸取紙の上に裏向きに置いて、丁寧にインキを拭ひ取つて、さて私に其の淨書をくられた。ニューヨークから到着したばかりの私は、全く呆氣に取られて此處を出て行つた。さうして、幾回となく鉛筆を持つ手を振つて運轉を附けて、猛烈な勢で切符の文字を書いた米國人と較べて考へて見た。

其の春、パリの郵便局に書留小包を出しに行つた。慣

れない私は誤つて受取人の欄へ自分の住所、姓名、差出人の欄へ先方の住所、姓名を書いてゐた。これを局の小窓から差出す時、私はふと氣附いて「おや。」と言ふと、局員の佛國人がつとペンを取つて、受取人といふ字を抹消して差出人と書き、差出人といふ字を抹消して受取人と書いた。なるほど、これで送票は完成した譯である。然もそれがほんの一瞬間だつた。私は全く感服して了つた。さうして、ニューヨークの切符賣と、ロンドンの役人と、パリの郵便局員とを頭の中で列べて見た。——鳩と蟻と蜜蜂と。

下田次郎
文學博士。東京女子高等師範學校名譽教授。東京市の人。

一〇 味はひある生活

下田次郎

物には味といふものがある。砂糖は始から甘いし、鰯は噛んで居るうちに味が出て来る。どちらもその物をもつた味であるが、その外附味といふのもある。きなこ餅や田樂豆腐などはそれである。本人に取りえのある人は、砂糖や鰯の如く、着物や紅白粉で外から味をつけた人は、きなこ餅や田樂豆腐の類であらう。生活でもやはりそのやうなもので、本當に味はひのある生活と、一向見かけ倒しの、實質的には何等の味はひもない生活とがある。或高原に避暑に行つて居る婦人が、

夫の車の後押しをして行く農夫の妻を見て、羨んだといふ事を聞いたが、年中することもなく、美服を着て人形のやうにして居たのでは、さぞつまらない事であらう。する事のない人間ほど氣の毒なものはない。世には交際が生活だと思つて、頻りに交際に勉めて居る人がある。かゝる人は、結婚の披露に呼ばれることと、葬式に行くことと、出産の喜びに行くこととが、生活の重大事件だと思つて居る。これは、多くは形式的表面の生活で、自分の生活の實質に關係のあるものではない。かかる人達の生活から儀式を除いたらば、何が残るか。繪の貴ばれるのは、その繪が傑作であるからであつて、額縁

が立派だからではない。世間には中味の繪を忘れて、額縁が立派だと思つて居る人もある。

富み足る生活は貧苦と缺乏との生活よりは好ましいものであらう。しかし、それも人に由るので、何をするといふ目的もなく、學問能力もなく、徒らに富み足りた生活は退屈である。停車場で一時間汽車を待つ退屈さから推して、一生汽車を待つ退屈さが續いたらば、どんなに苦しいことであらう。ショーペンハウエルは「退屈ほど堪へられないものはない。そしてその眞の源は、心の空虚にある。」といつた。かゝる退屈の生涯こそは、眞に悲惨なものである。

ショーペンハウエル
 獨逸の哲學者（西
 紀一七六一—一八六〇）。

かゝる生活は欠伸の連發か、儀式・社交の出入かの外に取るべき途はなく、その結果は顎骨の發達か、世辭の巧妙となつて、眞の生活と何等の交渉もないものである。

若き時學ばぬ悔いをかみしむる

奥齒なきまで身は老いにけり

はまだいゝが、若い時分からこれでは、何のための人が分らない。内容の空虚な人の交際ほど慇懃を極めたものはない。それより外に何物もないからである。「つれづれといとまあるまゝに、訪ひ來りて長居するはわびし。」と貝原益軒は困り、「世俗無用の長談御用捨下さるべく候。」と平田篤胤は斷つた。しかし、それより外に、暮し方のつ

貝原益軒
 二十頁頭註参照。

平田篤胤
 通稱大齋。國學者。
 羽後國（秋田縣）の
 人。天保十三年（三
 五）歿、年六十八。

かぬ人があるのは氣の毒である。その反對に、いくら聽いて居ても飽きない、切上げられるのが惜しいやうな話をする人もある。それは學殖や趣味のある人の話である。そんな人になりたいたいものである。

生きるといふことは、世界に於ける最も稀有なことである。古人は「汝自らを知れ」といつたが、それより大切なのは、「汝自らであれ」といふことである。多くの人間はたゞそこに居るといふだけである。人が物質的に何をもつて居るかは大した問題ではない。大切なのは、その人が何であるかである。人は自己の有する特長を發揮し、自己として最も價値ある生活を營

汝自らを知れ
ギリシヤのアポ
ロンの神殿に掲げ
られた語で、ソク
ラテスがその活動
の標語としたも
の。

むべきである。

とのオスカ・ワイルドの意見には、少しく生活といふ事について考へる者は、共鳴せざるを得ないであらう。

外から附けた物で生きて居る人は、それが何であらうとも、大した人間ではない。又婦人はダンスと箏箏が好きだといふが、着物と踊とが生活の内容なら、美装した猿だつて、そのくらゐの生活はする。貧乏で苦しい生活にも生活の味はひがある。否、人間の靈性が光を放ち、その最善が發揮されるのは、富裕と安逸との生活よりも、寧ろ貧乏と苦痛との生活に於てである。眞の喜びは、安樂の生活に於てよりも、却つて困苦の生活に於て味ははれる。

ワイルド
英國の文學者（西
紀六英一五〇）。

畫家ミレーは、如何に貧乏を材料として、その生活と繪畫とを作り上げたか。傑作は必ずしも作物にのみあるのではない。生活そのものにも傑作はあるのである。ミレーに繪畫がなくとも、その作品以上に、その生活が傑作であつたのである。凡人として生活の傑作は望めないとしても、生きがひのある、味はひのある生活はしたいものである。それは唯交際や、儀式や、買物や、ダンスや、着物の見せ合ひの生活ではなくて、奮闘の生活であり、努力の生活であり、汗の生活であり、血のにじむ生活でなくてはならぬ。緊張もなく、感激もない生活、水にふやけたパンのやうな生活に、何の味はひがあらうぞ。

立てる農夫云々
西 諺。

「立てる農夫は坐せる紳士に優る。」といふ語があるが、同じことが婦人についてもいへるであらう。遊んで暮して居るのが見えの時代は過ぎ去つた。何か意義のある事をして、生活の内容を充實しなくてはならぬ。飾窓の人形のやうな生活は、如何に美しくても駄目である。あらゆる附加物を取去つて、正味の自分が何であるかを考へて見よう。豊富な學問、優秀な技能、貴重な經驗、洗煉された趣味、微妙な感情、暖かい同情、燃ゆる意氣、不撓の努力、それらが縦絲・横絲となつて織りなされた生活こそは、眞に錦繡の生活であつて、最も生きがひのあるものに違ひない。

(婦人と希望)

廣瀬謙三
運動記者。東京市
の人。明治二十八
年生。

二 オリンピック

廣瀬謙三

オリンピック！

オリンピック！

その名を聞いただけでも私たちの心はをどる。世界の各地から、それ／＼國旗をかざして集つた何千といふ選手が、美しいトラックに、青々と水をたゝへたプールに、人間最高の記録を目がけて、花々しく争ふその壯快さ。

國と國との憎しみは、こゝにはない。利害をめぐる奪ひあひも、こゝには見ることが出来ない。たとへ皮膚の色は異ならうとも、言葉はめい／＼違はうとも、何千人の

選手はひとしくこの大會の規則に従ひ、同じ条件のもとに立つて、雄々しく力を競べあふのだ。遠く離れた國々が、こゝに覇權を争ひつゝ親しみあふ。公明な勝負を戦ひつゝ睦みあふ。

男らしい競争の中に輝くものは、國籍の異なる相手に對する氣持よい尊敬！

勝つも負くるも、一齊に喜ぶところは人間最高の新記録！

これこそ、今の時代に一番朗らかな全世界の祭日である。全人類の握手である。オリンピックの精神はローマの詩人が歌つたやうに、ど

こまでも、健全なる精神は健全なる身體に宿るこそ望ましかれ。」である。

この點を近代オリンピック競技の創始者クーベルタン男爵も強調して、

「現代のオリンピック主義とは何ぞ。

人生の主眼とするところは戦ふといふことそのものにあつて、勝利を得ることは第二の問題であると思ふ。従つて最も肝要なことは、勝つか負けるかといふことではなくて、どうすれば立派に戦ふことが出来るかといふことにあるのである。

クーベルタン
佛蘭西の體育提唱
家、近代オリンピック
ク競技の復活者。
(西紀一六三)

かういふ考へをいだけ者が多くなればなるほど、私共は勇敢にして確固たる人生を送ることが出来ると信ずる。この考へは單にスポーツのみに限らず、人事百般に就いてもいはれることで、健全且幸福な人生觀の基礎をなすものである。

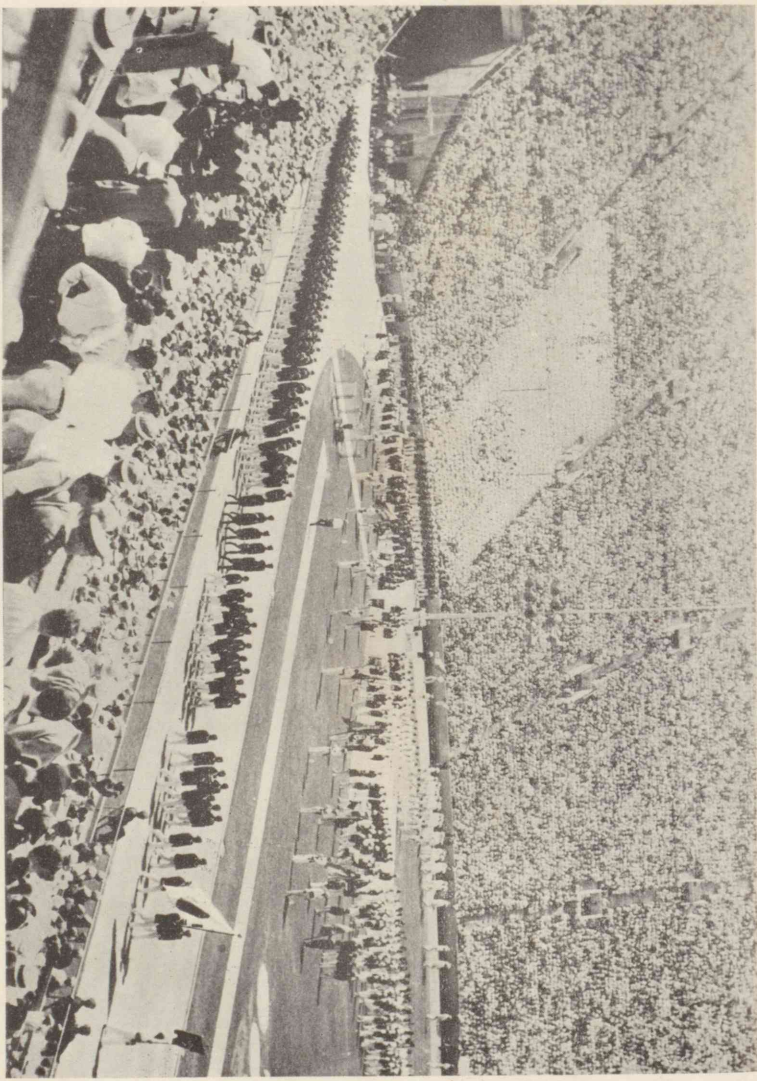
オリンピック精神を全世界に押擴めようとする運動は、一つの理想をたて、それによつて行はれてゐる。そしてこの理想は實際に適合するものであるから、必ず實現するものと思ふ。すなはち、『身體の强健』、『審美眼の養成』、『國家社會のために働く』といふ要素から成り立つもので、この三つは相結合して離すことの出来ない關係にあるの

である。故に、全人類が互に友情を重んじ、遠く後世に輝くオリンピックの烽火の下に層一層国際親善の實を擧げ、引いて熱烈果敢、純真なる人生の開かれることを、私は心から希望する。」と云つてゐる。

昭和七年八月その第十回大會は、アメリカ太平洋岸のロサンゼルス市に開かれた。

八月十二日。馬術競技に於て、城戸中佐が野外騎乗最後の障碍で、馬を勞つてつひに棄權した時の物語は、優勝にもまして各國の人々に多大の感動を與へたのであつた。その日はこの大會に、水上に日本が絶対の覇業をな

ロサンゼルス
米國の太平洋岸第一の都會。カリフォルニア州に在る。
城戸中佐
名は俊三。宮内省主馬寮車馬監。宮城縣の人。第九、十回國際オリンピック大會出場。佛、白、英各國國際馬術競技に入賞した。



(場入の手選本日) 式場入會大ク、ピソリオ回十第年七和昭

してゐる時であつた。コースは二十五マイル、城戸中佐の乗馬久軍は走り、且飛び、各種障碍も難なく征服して、ダブルジャンプの難關を乗り切れば、あとは最後の高障碍が一つである。久軍はこの時もはや疲労して苦しさうにあへいでゐた。しかし、たつた四フット六インチの障碍物、今一むちで優勝に突進することが出来ないわけでもない。だが、中佐のむちは動かなかつた。馬は障碍物の間近でびたりととまつて、手綱を轡でしゃくつてゐる。十七歳の久軍は、今までの奮闘に全身汗を浴びて呼吸をはずませてゐるのである。さうだ、馬はもはや全力をつくしたのだ。中佐は無言でひらりと馬から飛びおりた。

中佐の目には笑みが洩れた。馬の耳もとに労りの言葉がさゝやかれた。久軍はその言葉がわかつたかのやうに、鼻を中佐の肩に埋めた。數秒、主従はそのまゝ無言で立つてゐた。久軍はしきりに主人の顔を自分の首でかくやうな表情をしたが、中佐は自分に向つて詫びてゐる久軍を勞りながら、男らしくその場を引揚げた。

この光景には、審判官も觀衆も、そつと涙をぬぐはずにはゐられなかつたといふことである。

〔少國民文庫に據る〕

新井白石

名は君美。儒者。江戸の人。享保十年(三三)歿。年六十九。

山内一豊

尾張國(愛知縣)の人。もと織田信長に仕へ、後、徳川家康に従ふ。慶長十年(三三)歿。年六十。

安土
近江國(滋賀縣)。

口をし

二三 山内一豊の妻

新井白石

一豊、織田家に出で仕へし初、東國第一の名馬なりとて安土に引き來りて商ふ者あり。織田家の家人等これを見るに、誠に無雙の名馬なり。されど價あまりに貴くして、買ふべき人一人もなく、空しく引きて歸らんとす。

その頃、一豊は猪右衛門尉と申ししが、この馬欲しと思へども、求むることいかにも叶ふべからず。家に歸りて、世の中に身貧しきほど口をしきことはなし。一豊仕への初なり。かゝる馬に乗りて見參に入りたらんには、屋形の御感にもあづかるべきものを。」と獨言いひしに、妻

みづから
まゐらす

ことわり

はつくぐと聞きて、その馬の價はいかばかりにや。」と問ふ。「黄金十兩とこそいひつれ。」と答ふ。妻、さほどに思ひ給はんには、その馬求め給へ。價をば、みづからまゐらすべし。」とて、鏡の篋はこの底より黄金十兩取り出しまゐらす。



(要綱學幼) 妻の豊一内山

一豊大きに驚き、この年頃、身貧しく、苦しき事のみ多き中にも、この黄金ありとも知らせ給はず。いかに心強くは包み給ひけん。されども、今この馬得べしとは思ひもよらざりき。」と、且は喜び、且は恨む。妻は、「宣ふ所ことわりにこそ侍れ。さりながら、これは妾

が父の、この家に参りし時に、この鏡の下に入れ給ひて、あなかしこ、これ、世の常の事に用ふべからず。汝が夫の、一大事あらん時に参らせよ。」とて賜ひき。されば、家貧しく、苦しむなどといふ事は、世の常の習なり。これはいかに堪へ忍びても過ぎなまし。誠か、この度都にて御馬揃あるべしなど聞ゆ。若しきもあらんには、天下の見物なり。君また仕への初なり。かゝる時ならでは、屋形にも朋輩にも見知られ給ふべきよしもなし。良き馬召して見参に入れ給へと思へばこそ参らすれ。」といふ。一豊、やがてその馬求む。

程なく都にて馬揃のありし時、織田殿この馬御覽あつ

て、大きに驚き給ひ、「あつばれ名馬や。何者の馬ぞ。」と仰せありしに、「これは東國第一の馬なりとて、商人が引いて参りしが、餘りに價貴くして、誰も買ふこと叶はず、空しく歸るべかりしを、山内が買ひ得て候ひき。」と申す。信長聞し召し、「價貴き馬なり。當時天下に、信長が家ならで買ふべき人なしとて、輿より遙々來りしを、空しく還したらんには無念の至なるべし。その山内は、年久しき浪人と聞く。家もさぞ貧しからんに、買ひ得たる事の神妙さよ。且は信長の家の恥をも雪ぎ、且は武士のたしなみいと深し。」と感じ給ふこと大方ならず。これより次第に身を起せりといふ。

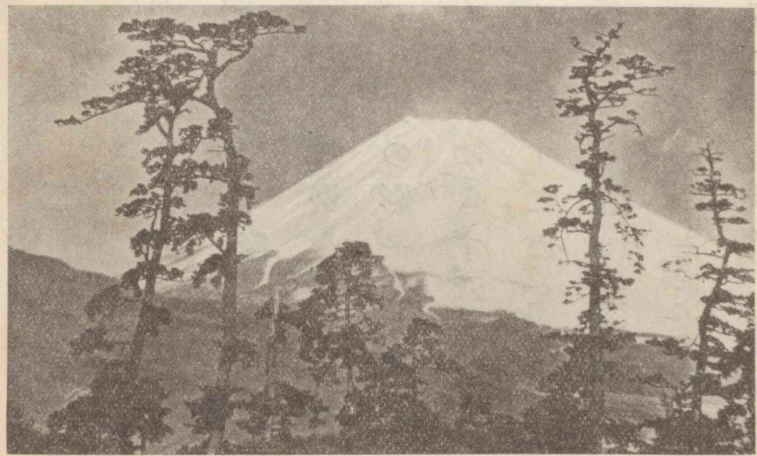
(藩翰譜)

一三 富士登山

荻原井泉水

荻原井泉水
名は藤吉。俳人。
東京市の人。明治
十七年生。

お山は實に鮮やかに晴れてゐる。夕陽の色どりを失つて、只黒く隆々と盛り上つた偉大な土の塊かたまりが、却つて彫刻的な尊嚴を以て仰がれた。空は硝子の様に透明で、ちぎれ雲の影一つさへなかつた。晝の光が消え失せたにもかゝらず、空氣そのものが光を持つてゐる様に、薄青く暮れずにゐた。路はお山へ向けて眞直ぐについてゐた。馬は慣れた道を心得顔に、自分の好きな步調で私たちを運んでゐた。こゝらの裾野は小松が多かつた。小松の中に秋草が様々に咲いてゐるらしいが、丈の低いの



富士山

は皆夕べの色に埋もれてしまつて、丈の高い女郎花と、路に近く咲いてゐる月見草とだけが暮れ残つてゐた。ふと西の空を見ると、今しもにじみ出た明星がたつた一つ、ぱつちりと光つてゐた。それはこの限りない野の廣さを支配する神の灯かとも見えた。又、この山の昔ながらの尊さを、私たちに暗示する

表象かとも思はれた。私はだん／＼と薄れる靄に包まれて行くあたりの景色を、馬上から眺めながら、そしてその目でじつと明星を見つめてゐると、何といふことなしに、涙ぐましいほどな美しくさびしい感激が、心にこみあげて来るのを覺えた。

「お、月が——」私は覺えず馬上でかう叫んだ。それは東の空に低く、研ぎすまされたまん圓い光が玲瓏と搖ぎ出た所であつた。月が出ると共に、景色の調子はすべて一變した。今まで一様に薄青かつた空や、裾野は、くつきりとして、光と影との二つに分れた。空は朗々として光澤を帯びた。そして、お山はいよ／＼黒く大きな姿を

腹復復

以て出現した。その半腹から上の方には、小さな寶石のやうな灯が點々として鑲められてゐた。それは石室の灯であつた。路の上にも白い光が流れて來た。そして、私たちの七頭の馬が長い黒い影を投げはじめた。

馬返しの茶屋に着いた時は、夜氣を感じる程だつた。「これから山も高くなるし、夜もふけるから」と、強力がいふので、私たちはメリヤスの肌着を着込んだ。櫓はたの明りの暗い手元で、饅頭を一杯づつ食べた。そして又、自分自分の馬に乗つた。「今夜のお山はいゝぞ。」「こんな日和は今年になつて初めてだ。」馬子と茶屋の主人とが、かう話してゐた。

勾句

一合目から上は樹の茂りがある。月は大分高くなつたらしいが、枝がこんもりと茂つてゐたので、路は暗かつた。先に立つて行く馬子が一人、提灯をつけて馬をひいて行く。後ろの馬はたゞ先の馬に續いて、暗い中を進むのであつた。勾配もだん／＼急になつた。それに岩や石が多いらしく、馬の蹄の音がかつ／＼と鋭く鳴つて來た。暗さの爲か、急な上りの爲か、馬は時々躓いた。さういふ時には、蹄鐵から火花が飛び散つた。併し樹の枝の薄くなつてゐる所では、月の光が雪のやうに葉の上にかがやいて、そこらを明るくした。又、ふつと茂みのとだえて居る所では、月の光が瀧のやうになだれ落ちて、路の上

とだえて

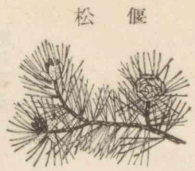
に溢れて居た。さういふ所を、馬は勇ましく歩を運んだ。三合目・四合目の室はもう戸を閉ぢてゐる。その前をひつそりと乗りながら過ぎた。五合目に着くと、馬は心得たやうにびつたりと止つた。樹帯はこゝらで全く盡きて、月はお山一面に照つてゐた。私たちは馬を下りた。馬はしつとりと汗ばんで、水を浴びたやうに濡れた肌を月にさらしながら、おとなしく足を揃へて居た。私たちはそのこの室にはひつて、熱い茶を旨く味はつた。そして、用意して來た夕食の辨當を開いた。室には宿泊してゐる人が、布團一枚をひつかけて、ごろ／＼と寝て居た。五合目は「天地の境」と稱せられて居る。如何にもこの

吉田口
山梨縣、富士山の
東北麓の登山口。

船津
富士山麓の河口湖
畔に在る。

金剛杖
登山者の携帯する
白木の八角又は四
角の杖。

あたりまで登ると、地上を離れたといふ感じがする。吉田口から裾野を來る時、しつとりと薄い夕霧が襲うて來るやうに思つたが、それはもや／＼とした白い雲となつて、こゝから見ると低く裾野一面を蔽うて居る。その彼方に、吉田の町の灯がちら／＼と光つてゐる。それよりも尙遠く尙幽かに見えるのが、船津の灯であつた。馬と馬子とを歸してからの私たちは、強力を先に立て、静かに／＼一歩々々を踏んで行つた。この夜ふけの山を踏んで居るものとしては、實に私たちだけであつた。鳥もゐず蟲もゐず、死のやうな静寂の中に、七人の金剛杖の音のみが、かちり／＼と岩にあたつて鳴つた。その杖



濱梨



薊



は、五合目の室で「天地の境」といふ焼印を押ししてくれたものだった。月はまことによく冴えて、何も遮るもののない山の肌は、晝のやうに明るかった。時計を出して見ると十時を二十三分過ぎてゐる。その針がはつきりと月光に讀まれた。

自分の服にさはつて見ると、露でじつとりと濕つてゐた。莫蔭や笠は暑さをしのぐ爲に身につけて來たのだが、それが今では露をしのぐ爲のものとなつた。山肌の岩や砂にすがつて生えてゐるわづかの青いもの——儼松や濱梨の木や薊など——の葉にも露が光つてゐた。空を見ると、まばらな星が、大きな露の雫のやうに、きらき

らしてゐた。さうした星が、ふつと流れて下界の方へ落ちたりした。こゝから見ると、白い雲が海のやうに浪立つてゐる、下界の方へ——

六合目の室はびつたり閉ぢて居たが、その前に差掛けのベンチが出来て居た。そこへ腰掛けて休んだ。私は精進の宿を立つ時、新しく替へて來た草鞋を踏み切つたので、強力の背から一足取つて穿きかへた。

頂に近くなるにつれて、路といふ路がなくなつてしまふ。纔かに人が踏んだあとの砂が、それと判るのであるけれども、踏み堅められてゐるのではなく、足をかけると、さくりくと亡るので、歩は著しくはかどらなかつた。

精進の宿
精進湖畔の宿屋。

なまじひ



六 根 清 淨

「さんげく——六根清淨。」
登山の行者が唱へるこの言葉を、
先へ行く者と後ろになつた者と
が、お互に呼びかはして、心を引き
しめ合つたりした。

七合目を越して八合目の室に
入つて休んだ。時計を見るとも
う一時を過ぎてゐた。非常に睡
いやうでもあつたが、こゝでなま
じひに眠つてはいかぬと思つた。
室の中の爐で木の枝を焚く煙が

非常にけむくて、目から涙がぼろ／＼と落ちた。やはり
目が疲れてゐる爲だと思つた。室の一隅に幕を引いて、
別室のやうに仕切つて泊つてゐた外人の一群は、もう起
きて、立つ用意をしてゐた。頂上で御來迎を觀ようとす
るならば、そろ／＼こゝを出なければならぬ頃だ。いつ
か爐の傍らに横になつて眠つてしまつてゐた強力の青
年を呼び起して、私たちは又登りはじめた。
山に酔つたといふよりも、睡眠を奪はれた爲であらう、
頭がふらく／＼する。さういふ者が私の外に一人二人あ
つた。自分の莫産を山の勾配の儘に砂の上に敷いて、ご
ろりと寝て見た。砂の上には草一本の影もない。月は

ちやうど額の上に懸つて、いよ／＼天心に澄み切つてゐる。頭を高く仰向けになつた視線のうつろなはてに、北斗七星がきら／＼と光つてゐる。私はその一つをじつと見つめてゐた。と、その星がふら／＼と動き始める。小さな螺旋を描きながら踊つてゐる。不思議だなと思つて他の一つの星を見つめた。するとその星も亦、螢の様にゆら／＼と舞ひ始めた。これは幻覺だ。さう思ふと眼の疲労の激しいことが解つた。また月を見た。月の光が眩し過ぎて涙がにじみ出た。九合目には久須志神社といふ社がある。そこへ入つて休んだ。神官の二人が、なか／＼寒い。併し今朝は氷が張らないから――

幻一幼

久須志神社
吉田口から登りつ
めた頂上薬師岳に
在る神社。

「などと、もう朝の言葉を交はしてゐた。さうして私たちには、こゝは日の御子といつて、東へ真正面の所です。こちらで御來迎をお拜みなさい。」といつたが、日の出までははまだ二時間近くも間があるので、私たちは頂上を指す事にした。「頂上へ行く方は御祓おはらひをしていらつしやい。」神官はかうもいつて祝詞のりとを讀んだ。それは、このよき日にお山へ詣でるよき人々の一族の平安を祈るといふ意味を、神代の長々しい言葉を集めて綴つたものだった。そして大きな御幣で、皆の並べた頭の上をばさりばさりとはらつた。外へ出ると、これまで感じなかつた風が冷え／＼と動いてゐた。それが黎明の近い事を思は

幣一弊

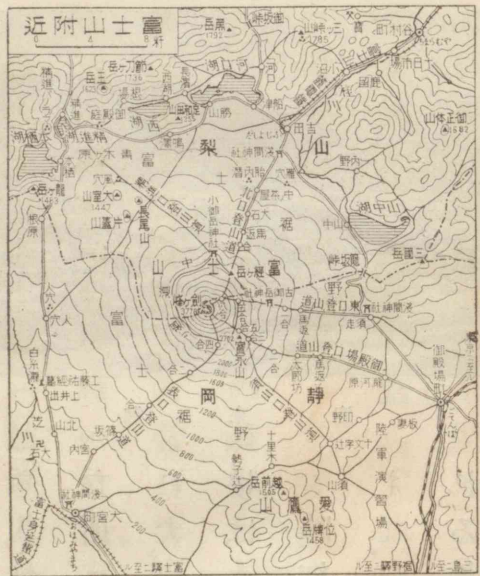
けぢめ

せた。又、その風がふらくした頭を幾分かしつかりさせてくれた。

月の光は漸く衰へ始めた。その上、路が東へ廻つたため、西へ傾きかけた月が頂の峯の陰になつてしまつた。光と影との差別は薄らいで、裾野の夕べに見た様な混沌として青白い色が一樣に漂うて來た、その混沌たるものの中から、新しい光の生まれるのを待つばかりになつた。下界は——殊に甲州に寄つた方は——雲がびつしり閉してゐた。その雲のはづれに、今までは雲と同じやうに白く見えてゐたものが、大きな勾玉の形をした湖水であるといふけぢめも、やつと明らかに認められた。それが

五湖
本栖・精進・西・河口・山中

山中湖であつた。五湖の一として見残したこの湖を、私たちはかうして鳥瞰的に眺め得たのであつた。



凍える

頂上の室では、もう灯を消して居たが、屋根の下は薄暗かつた。そこへ私たちは上つて御來迎を待つことにした。じつとしてゐると、寒さはひし／＼と身に迫つて來る。手は凍え、下の室を早く立つて來たと見える人々がぼつ／＼

と登つて来て、室はいつか一杯になつてしまつた。皆、草



御 來 迎

鞋のまゝで上るのだが、脚と脚と
を入れちがへて餘地もないやう
な所へ、牡丹餅の箱などが並べら
れた。名物といふ眞黒な甘酒だ
けはうまかつた。

曉紅！ 朝の始る前の先觸と
して、ほんのりとぼかし染にせら
れる地平線の赤さは、かうして高
みから眺める時に、たゞに美しい
許りでなく、地上の物の一切の希望を語つてゐるやうな

純潔なる尊さがにじみ出てゐる。「あゝ、ぢきに御來迎だ
——」さういふ言葉が口々に傳へられて室の中にあたる者
も皆外に出た。大分明るくなつた岩の上には霜が置か
れてゐた。それを踏んで寒さうな緊張した顔が並んだ。
地平線の赤さは、うつすりと吸ひ取られて、雲ではない
がある神聖なものの誕生をつゝんでゐる幕のやうな霞
が、つやく／＼しい光を帯びて來た。
——つと、一點の輝いた朱の色が、霞の幕を押分けたと
思ふ間に、その朱の一點が見る／＼擴がつて、麗しい太陽
の姿となつた。刹那、新しい光線は地上に又天上に漲つ
て來た。その第一の光線がまつしぐらに届いたのは、こ

の頂上に立並んである私たちの瞳であつた。

朗らかな朝は來た。大空は實によく晴れてゐた。大

地も實によく晴れてゐた。太陽を産んだ後の霞が消え

た所に、煙の靡くやうに仄かに這つてゐるのは房總半島

である。海は空と差別がないが、雲のやうに置かれた大

島が、そこは太平洋の中だといふ事を示してゐた。その

手前に、更に鮮やかに一抹の線を引いてゐるのが三浦半

島である。海岸線に沿うて目を移すと、小さくしかも靜

かに江の島が見える。馬入川が見える。その右手は大

磯であらう。小田原熱海と思はれる邊も、箱根や足柄の

山々も、水銀を盛つたやうな蘆の湖が、外輪山の器の中に

三浦半島

東京灣の西をかぎ
る小半島、神奈川
縣に屬してゐる。

江の島

神奈川縣鎌倉郡片
瀬の海岸に近い岩
島。

大磯

神奈川縣中郡。

小田原

神奈川縣足柄郡、
箱根山東麓。

熱海

靜岡縣田方郡。
溫泉場。

愛鷹山

富士山南麓の峻
嶺。海拔約二〇〇
〇米。

天城山

最高峯は萬嶽。海
拔約一四〇〇米。

沼津

靜岡縣駿東郡。

原

靜岡縣駿東郡。

田子の浦

靜岡縣庵原郡。

御前崎

靜岡縣榛原郡。

秘められてゐるのも、手にとるやうに見える。近くは愛

鷹山の青い隆起を隔てて、天城山を重心とする伊豆半島

がどつしりと延びてゐる。その右には洋々とした駿河

灣が、描き残された素絹の白さを以て光つてゐた。沼津

原、田子の浦と、順々に南を眺めると、蛇の匍うたやうな富

士川を越えて、三保の岬が小さく清水灣を抱いてゐる。

その先に突出してゐるのは御前崎であらうか、そこらは

もう霞んでゐる。私はこの大きなパノラマのやうな景

觀に心を放つてゐた。

太陽はずん／＼と高く昇つて、強い光が靈山の頂から

下界へ向けて擴がつて行つた。

(山水巡禮)

海上龍子
歌人。海上胤平の
養女。福島縣の人。
明治十三年生。

茶白山
今大阪市天王寺
區。

夏の陣
元和元年(三七五)。

去年
慶長十九年(三七
四)。

一四 一樹の陰

海上龍子

影にそふ形のごとく亡き靈も

君を守りて離れざりけん

茶白山の和議争でか長へに平和を保たんや。これ固より一時の權謀に過ぎず。軍馬を休めしも束の間にて、再び夏の陣とはなりぬ。關東の寄手大舉して大阪城を圍む。故太閤の餘徳を偲びて參集せしもの數萬騎に及べども、譜代の士少くして、多くはたゞこれ烏合の勇士のみ。

去年の十二月二十二日、和議の御誓文御取交の使とし

木村重成
豊臣秀頼の臣。

今福
今大阪市鯉江町。



(種百畫史) 成 重 村 木

て、主命を辱かしめず、然も其の威風關東武士の膽を寒からしめ、なほ老將家康をして感涙の袖を絞らしめたる木村長門守重成の妻は、眞野豊後守頼包の女なり。容姿の美にも彌増し、心は優にして操いと高し。

昨日今日夫の氣色常に變りて、食事さへ斥け、深き思案に打沈めるを見て、訝しさに堪へず、夫に向ひて、去年今福の合戦に、君の功名の大なりしには、關東五

十萬の大軍も驚きたりと傳へ聞き侍る。今豊臣氏の武運は朝暮に迫れり。日頃の御高恩に報い奉るは今日なり。然るに、何とて、物思はしげにして、食事をさへ斥け給ふぞや。」と問ふ。重成莞爾として打笑み、「御身の訝しむも理なり。こは餘の儀にあらず。五穀胃に入りて、二十四時を経ざれば消えずといへり。今はいつ討死するか測り難し。されば、穢き物を斥けて、潔き心を出さんのみ。」と。夫人これを知りて欣然として退く。

翌朝起き出づれば、こは如何に夜半の嵐も吹かなくに、難波の春に先立ちて、散り行く梅の花一輪、我と我が喉搔切り、見事に自害して夫を勵ましたり。重成且驚き且悲

一樹の陰云々
 「一樹の下に宿り、
 一河の流を沈み、
 一夜同宿、一日夫妻、皆是れ先世の結縁。」
 (説法明眼論)

項羽

名は籍。楚の人(西紀前三三二一〇〇)。

虞氏

項羽の愛妃。

木曾義仲

源為義の孫。義賢の子。壽永三年(八四)歿、年三十一。

松殿の局

關白藤原基房の女。基房は松殿と稱した。このことは源平盛衰記卷三十五にある。

しみつゝ、妻の遺書を見れば、水莖の跡鮮やかに、一樹の陰、一河の流、これ他生の縁と承り居り候が、さてもをとゞせの頃ほひ、偕老の契をなしてより、たゞ影の形に添ふが如く思ひ参らせ候に、此の頃承り候へば、此の世かぎりの御催の由、陰ながら嬉しく思ひ参らせ候。唐の項羽とやらんは世に猛き武士なれど、虞氏の爲に名残を惜しみ、木曾義仲は松殿の局に別れを惜しみきとかや。されば、世に望窮りし妻が身にては、せめて御身の御在世の中に最期を致し、死出の道とやらんにて待上げ奉り候。必ず秀頼公多年海山の鴻恩を御忘却なきやう頼み上げ参らせ候。あら〜かしこ。

長門守重成様

妻より

さても健氣なる覺悟やと、疾くに死を決したる重成の心は、妻の自殺によりて益、固く愈奮ひぬ。今福の合戦に一騎當千と聞えし剛の者木村重成も、元和元年五月六日、遂に其の首を安藤某の手に渡しぬ。

若木の櫻は散りても、髻の中の蘭麝の薫は長へに世に匂ひて、今に滅びざる天晴ゆかしき重成の最期と共に並び稱へらるゝは、其の妻の最期なり。時に重成は二十一歳、妻は十八歳なりき。

(たのもしき婦人)

一五 知らぬ火

橋 南 谿

筑紫の海に出づる知らぬ火は、例年七月晦日の夜なり。昔より世に名高きものにて、今も九州の地にては、諸國より此の夜は集り來りて見る事なり。予は、益後、早く長崎を立ちて、雲仙が嶽にのぼり、それより島原に出で、城下より舟に乗り、天草に渡り、天草の惣象といへる山の峯にて見物せり。まづ島原にて、「知らぬ火見るはいづれの地よるしきか。」と尋ね問ふに、「肥後國宇土八代松橋の邊の浦浦よし。又殊によく見ゆるは天草の島なり。」といふにぞ、さらば、天草に渡るべしと、便船尋ぬるに、邊土ゆゑに、便

橋南谿

本姓宮川。名は春暉。醫者。文人。伊勢國(三重縣)の人。文化二年(三零)の丙戌、年五十三。筑紫の海有明海をさす。

長崎

今の長崎市。

雲仙が嶽

長崎縣の島原半島にある。雲泉岳とも書く。

島原

雲仙嶽の東麓にあつて海に臨む。

天草

天草灘中の島。

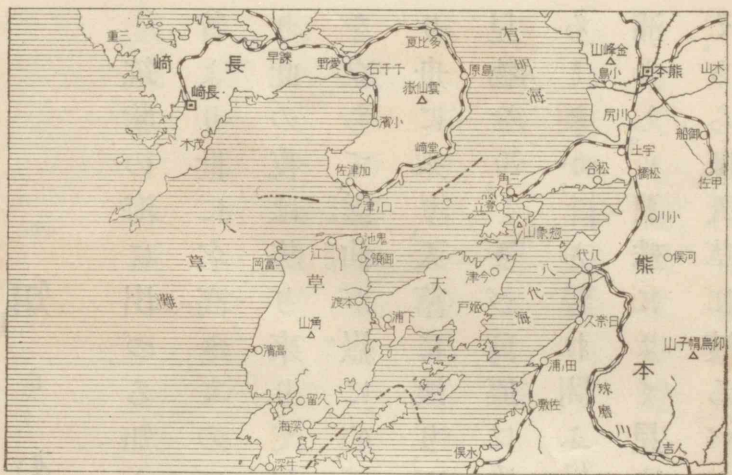
宇土

肥後國(熊本縣)宇土郡。

八代

同國(同)八代郡。

松橋
肥後國(熊本縣)下
益城郡宇土と八代
の間にある。



船もなければ、小さき漁船をか
りて渡る。此の日天氣殊にの
どやかにして、海上風靜かなれ
ば、四方の眺殊によし。雲仙が
嶽はうしろに聳え、向ふ遙かに
東南に連なりて、天草の島青み
わたりたり。此の海は、高山の
麓ゆるるにことに深く、百五六
十尋もありとぞ。乗れる船は
漁船なれば、かゝる事もよく知
り居て語り聞かす。面白き物

三角
肥後國(熊本縣)三
角半島の西北端に
ある。



語に心慰みて、數里の海上も程近きやうに覺えて、はや天
草の地方かたに近づけり。天草の砥石いし
山などいふ處を右に見なし、三角すみと
三三いふ處より、山の間三に船さし入れて
行く。左右六七町に過ぎじと見え、
水清く山峙ちて、風景又他に異なり。
北へくじけ、南へまがりて尋ね入る
に、緑につゞく小松の間に、藁屋の軒
いと靜かなり。何人の住むにやとゆかしくも見る。右
の方は、波打際所廣く、砂子いさごの清きこと、霜を置けるが如く
なれば、「いざや此處にて船しぼし。」といへば、やがて渚に

鉾

形槍の如く柄の長
さ三間、先は鐵で
つくり三つにわれ
彎曲して長さ一尺
位、石づきのとこ
ろに長い綱をつけ
てある。これを投
げて魚をとる。



鱧

船さしよせて、錨おろす。船頭いふは、「此の濱邊には、ちい
さき蛸たこ多し。おりたちて取り給へ。」といふに、潮は淺し、
砂は清し、皆々おりて蛸見ありく。田舎には珍しからぬ
事も、京都に住める身は、いと心慰めり。船頭は鉾ほ打ちか
たげつゝ、船さし行きしが、程なく二尺に近き鱸すずき一つ、突き
得て歸れり。取敢ず料理して煮る。鮮あざけくして味はひ
の美なること更にもいはず。やゝ時移りぬれば、船さし
出して急ぐに、暮近きに、天草の惣象といふ處にいたる。
此の處は、少し民家ありて、多くは漁夫住めり。此の村
にあがりて、知らぬ火見る處の案内を頼みしに、百姓一人
心よううけがひて、いたくけがれぬ筵一枚携へ先に立つ。

熊本

今の熊本市。

日奈久

肥後國(熊本縣)葦
北郡八代の南にあ
る。

東の海の岸にさし出でたる山あり。高さ七八町もや有
らん、此のあたりにての高山なるが、此の峯よろしと、筵打
敷きて坐す。眞向ひに肥後國ありて、只一望につくす。
宇土、熊本は少し左に見えたり。右に日奈久ひなぐ、向ひに八代、
その間の海上、わたり五六里より七八里に過ぎず。南北
は入海數十里にして、その限り見えず。案内の人指さし
て、右なるは鼠島なり、左は大島なり、それは三つの島、これ
は幾島と、數々をしふ。げに、海上三里ばかりに、いとちひ
さき島々見ゆ。「知らぬ火はいづれに出づるか。」と問ふ
に、「島々見ゆるあたり。」といふ。此處も初の程は人氣ひとげも
なく、いと物凄かりしが、追々に知らぬ火見物の人々出で

來りて、數十人に及ぶ。皆此の近國より、二日路、三日路をも來りて見物する人々なり。程なく海の表もやゝ夕煙引渡して、人顔もさだかならねば、所々松どもともし、思ひくゝに、小唄・淨瑠璃、或は謠・狂言など、各藝を盡くして戯れ遊ぶ。夜陰の事なれば誰とは知れず、諸方より集りたる事なれば、遠慮はなし、彼の座に登り、此の筵に連なり、隔てなくむつび語らふ事、有馬・但馬などの温泉の場の交の如し。今年は例よりは殘暑も強けれども、かゝる海邊の高山に、殊に空は快く晴れわたり、小夜風さよかぜおもむろに吹きて、いと涼しければ、夜の更くるもしらず、はや夜半にもなりしかど、知らぬ火のさたなし。

有馬

攝津國(兵庫縣)有馬郡にある。

但馬の温泉

兵庫縣城崎郡にある城崎温泉をさす。

八つ
午前二時頃。

今年はじめて見る人は、「今宵はいかなる事ぞ。知らぬ火は出でざるか。但しはそらごとなりや。」など、口々にいふ。予もあやしみ居たりしが、八つ近きところに、遙か向ふに、波を離れて、赤き色の火一つ見ゆ。暫くしてその火左右にわかれて三つになるやうに見えしが、それよりおひおひに出づるほどに、海上わたり四五里ばかりが間に、百千の數を知らず。明らかなるあり、幽かなるあり、滅ゆるあり、燃ゆるあり、高きあり、低きあり、誠に甚だ見事にして、目を驚かせり。その火の色皆赤くして、提燈の火を遠くのぞむが如く、たとへば大阪の天神祭を夥しく集めて見るに異ならず。實に諸國より來り見るもいたづらなら

大阪の天神祭

大阪の天神宮(大阪市北區大工町にある)の祭祀をいふ。こゝは毎年七月二十五日の夜に行はれる祭のことである。

ず。所の人に問ふに、年によりて、多きことも少き事も定らずとぞ。今年はずぐれて多く出でたるも、予が幸といふべし。廣き海中に出づる事なれば、天草に限らず、肥後の地よりも、何れの浦にても皆よく見ゆるなり。然れどもいかなるわけにや、高山にのぼる程多く見事に見ゆるとて、此の山なども群集せるなり。此の夜は、此のあたり、海中に龍神の燈明を出し給ふなりとて、おそれて渡海の船を禁ず。漁船といへども、此の一夜は乗る事なし。過ぎし年、肥後の士ひそかに小舟に乗りて、彼の火の出づる處にいたり見るに、只その火前後に遠く有りて、我が舟近くは一つも見えざりしとぞ。予も今宵まのあたり

姚江
支那浙江省紹興府
にある。

見しかどいかなる火といふ事を知るべからず。昔の人の知らぬ火と名付け置きしも、もつともこの事と覚えし。唐土には姚江の神燈などこれに似たる事ありとぞ。さて夜明くるまでかくの如くにして、旭出づれば火の光漸に薄くなり行きて、星とともに消滅す。むかし火の前の國、火の後の國と名附けられしも、ゆゑ有ることなり。中古の世、火の字をいみて、肥前肥後と改められしとぞ。又和歌の言葉などにも、知らぬ火の筑紫など書けり。九州に遊ばん人は、必ず此の折を考へて行くべき事なり。

(西遊記)

吉村冬彦
本名は寺田寅彦。
理學博士。高知縣
の人。昭和十年
歿、年五十九。

一六 涼み臺

吉村 冬彦

毎年夏になつて、そろ／＼夕方の風が戀しい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が中庭へ持出される。これが持出される日は、私の單調な一年中の生活に、一つの著しいくぎりを付ける重要な日になつてゐる。もう明日あたりは涼み臺を出さうぢやないかといふ事が、誰かの口から言ひ出される。しかし、其の翌日が雨であつたり、さうでなくても、色々の事に紛れたりして、つい一日二日と延びる。其の中にいよ／＼今日はと云ふ事になつて、朝の内に物置の屋根裏から臺が取下ろされ、一

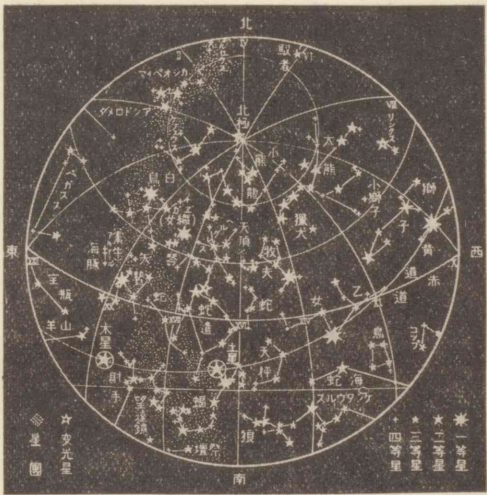
年中の塵埃や黴が、ぬれ雑巾で丁寧に拭ひ清められ、それから裏庭の日影で乾かされる。そしていよ／＼夕方になつて中庭に持出されると、それで始めて私の家に本當に夏が來たといふ心持になるのである。

涼み臺の外に、折り疊み椅子が三つ、同時に並べられて、一同が中庭へ集る。まだ明るい宵の中には、繩飛びをする者もあれば、寫生帖を出して、おばあさんの後姿をかくてゐる者もある。明朝咲く朝顔の蕾を數へて報告する者もある。幼い女兒二人は、縁側へ色々な花を並べて花屋さんごつこをする事もある。暗くなると、花火をしたり、お伽噺をしたり、おばあさんにお國の話させたりし

てゐる。幼い子等には、まだ見たことのない父母の郷國が、お伽噺の中の國のやうに、不思議な幻像に満たされてゐるやうに思はれるらしい。例へば郷里の家の前の流に家鴨が澤山遊んでゐて、夕方になると、上流の方の飼主が小船で連れに來るといふやうな、何でもなし話でさへ、何かしら一種の夢のやうなものを、幼い頭の中に描かせると見える。それでいつもお國の話をねだつては、おしまひに「あたしもお國へ行きたいなあ。」と一人が云ふと、もう一人が同じ言葉を繰り返すのである。子供等の亡祖父の若かつた頃の昔話も屢々出る。私自身が子供の時に幾度も聞かされた話が、また同じ母の口から出るの

を聞いてゐると、それがもう遠いく、昔の出來事であつて、數年前まで生きてゐた私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして祖父を見た事のない、或は臆げにしか覺えてゐない子供等には、會津戦争や西南戦争時代の昔話は、書物で見る古い歴史の斷片のやうにしか響かないだらう。そしてそれだけに、却つて祖父に對する懐かしみは、淨化され、純化されて、子供等の頭の中の神殿にをさめられるだらうと思はれる。今年の夏、涼み臺が持出されて間もなく、長男が宵の中に南方の空に輝く大きな赤味がかつた星を見つけて、あれは何かと聞いた。見るとそれは火星であつた。星座圖を出して來て、

其の上に鉛筆で現在の位置をしるし、其の脇へ日附をかいて置いて、此の夏中の此の遊星の軌道を圖の上で追跡して見ようといふことにした。それが動機となつて、子供は空のよくはれた晩には、時々星座圖を出して、目立つた星宿を見較べてゐた。其の頃はまだ織女や牽牛は宵の中にはかなり東にあつた。西の方の獅子宮には、白く大きな木星が屋根越しに氷のやうな光を投げてゐた。



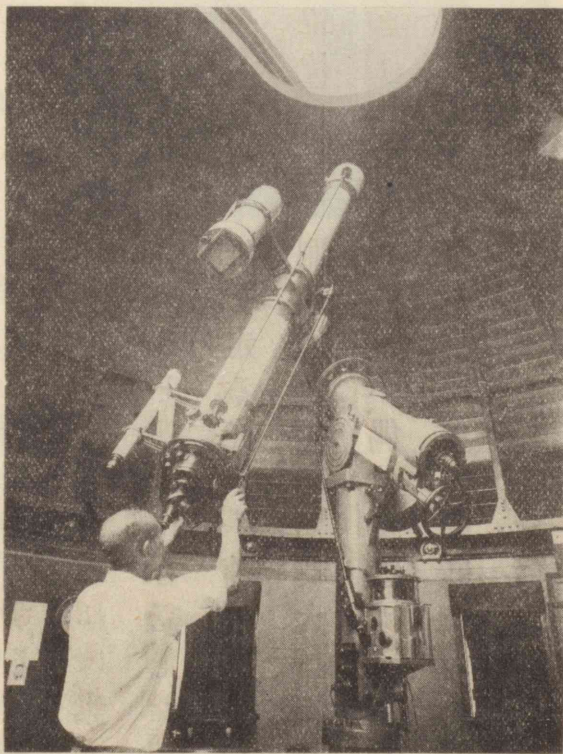
七月の星座圖

空を眺めてゐるうちに、時々流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星観測者が、夜中空を見張つてゐる話をして、それから新星の發見に關する話もして聞かせた。おもだつた星座を諳記してゐれば、素人でも新星を發見し得る機會はあるといふ事も話した。一秒時間に十八萬六千哩を走る光が、一箇年かゝつて達する距離を單位にして、測られるやうな莫大な距離をへだてて散布された天體の二つが、偶然接近して、新星の發現となる機會は、譬へば盲龜が百年に一度大海から首を出して、孔のあいた浮木にぶつかる機會にも比べられるほど少なさうであるが、天體の數の莫大な爲に、新星の

盲龜云々
稱揚諸佛功德經と
いふお經にある
句。逢ひがたいこ
とにたとへる。

出現はそれほど珍しいものではない。唯光度の著しく強いのが割合に稀である。

こんな話よりも子供を喜ばせたのは、新星の光が數十年の過去のものだといふ事であつた。我が家の先祖の誰かが、何處かでどうかしてゐたと同じ時刻に、遠い宇宙の片隅に突發した事



(臺象氣央中) 器測觀體天

の報知が、やつと今の世に、此の世界に届くといふ事變であつた。

八月になつてから、雨天や曇天がしばらく續いて、涼み臺も片隅の戸袋に立てかけられたまゝに幾日も經つた。或朝新聞を見てゐると、某理學士が流星の觀測中、白鳥星座に新星を發見したと云ふ記事が出てゐた。其の日の夕方に涼み臺へ出て、子供と共に其の新星を搜したらすぐ分つた。暫く見なかつた間に季節が進んでゐる事は、織女・牽牛が宵の中に眞上に來てゐるのでも知られた。そして新星はかなり天頂に近く、白鳥座の一番大きな二等星と光を争ふほどに、輝きまたゞいてゐるのであつた。

「暫く怠けたので、新星を発見しそこなつたね。」
と云つたら、子供はどう思つたか、顔を眞赤にして面白さ
うに笑つてゐた。

其の中にまた曇天が續いて、朝晩はもう秋の心地がす
る。どうかすると夜風は涼し過ぎる。涼み臺もつい忘
れられがちになつた。従つて星の事も、もう子供の頭か
らは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の變化を
研究すべき天文学者の仕事はこれから始るので、學者達
は毎晩曇つた空を眺めて、時間を待ちあかしてゐる事
であらう。

(冬彦集)

徳富蘆花

名は健次郎。小説家。熊本縣の人。昭和二年歿、年六十。

一七 我が家の富

徳富蘆花

家は十坪に過ぎず。庭は唯三坪。誰か言ふ、狭くして
且陋なり。」と。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狭きも
碧空を仰ぐべく、歩して永遠を思ふに足る。



徳富蘆花

神の月日は此所にも照れば、
四季も來り見舞ひ、風・雨・雪・霰か
はるがはる至りて興淺からず。
蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小
鳥來りて遊び、秋蛩きんこまた吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富
は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。



くちなし

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開きて樹に満つ。風ある日には、青々と霞める空より、白き花ちら／＼と舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。

隣家に花樹多し。風に随ひて飛花我が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るがうちに満庭花の衣を着く。子細に見れば桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

庭隅に一株のくちなしあり。五月闇鬱陶しき頃、香し

き白花を開く。主も妻も無口なれば、この花の我が家に開くは宜なりけり。

老李の背後に一株の碧梧あり。碧幹亭々として少しのゆがみなく、我が如く直かれと教ふるに似たり。梧桐と手水鉢の側なる八手とは葉闊うして、我が家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。



山茶花

つく／＼ぼふしの聲に世は何時しか秋に入りて、山茶

蛻巖
梁田蛻巖。明石藩
の儒者。寶曆七年
（四一七）歿。年八十
六。
蛻巖の九月九日の
詩。

花咲き、三尺許りの楓も紅に燃え出で、唯一株、前の家主の
植ゑ残したる黄菊も咲き出づ。名苑の花美しと言ふと
も、秋のあはれ閑寂の趣は、却つて我が庭の一枝にあるべ
し。蛻巖の翁なりせば、獨り憐む細菊の荊扉に近きを。
とや吟ぜん。恥づらくは「海内の文章布衣に落つ。」と唱
すべき身にあらざる事を。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして満樹金よりも黄
なり。木枯の風起れば、かぐや姫の扇にせまほしきその
葉翩々として飜り落つ。半夜夢覺めて雨かと疑ひ、曉に
起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も、庇

も、手水鉢も、所として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち
添ひて、寸金と人は言ふなる錦を、我は庭に敷きぬ。

木の葉落ち盡くしては、流石に寂しげなれど、日影月影
愈多くなりて、空を見、星を見るに障り少きは嬉し。

（自然と人生）

高濱虚子
名は清。小説家。
俳人。松山市の人。
明治七年生。

一八 蟲の音と秋草

高濱 虚子

闇の庭にはたゞ蟲の聲が聞える。少し朽ちた竹縁に腰をかけて、冷やかな沓脱石の上に素足をのせて、じつと闇の庭の面に向つてゐると、庭一面に蟲の聲がしてゐるやうに思はれる。

「あれは松蟲の聲だらうか。」

「あれはこほろぎの聲だらうか。」

「あれはいとゞの聲だらうか。」

「あれはきりぎりすの聲だらうか。」

などと、一つ／＼に蟲の聲を聞き分けようとするのは、ち

やうど綾錦の絲を、これは赤、これは青、これは金、これは緑と選り分けるやうなものである。なるほど一つ／＼の聲を聞き分けようとすれば、松蟲こほろぎいとゞきりぎりすと區別はつくけれども、それ等の蟲の音は、いづれも一枚の綾錦に織り成されたやうに、たゞ全體が凜々と響いて來るのである。闇の夜であるから、確かにはわからぬが、かしこにあるのであらう一叢の草の根元から、またこゝにあるのであらう一叢の草の根元から、それ等の蟲の音は湧きたつやうに響いて來る。何千・何萬・何十萬といふ數を量ることのできぬ數多くの蟲が、いづれも互に負けまいと音を張りあげるのであるから、可なり騒々

しい。しかしながら、「闇の涼しさ」といふやうなものがあるのなら、それは必ずこの蟲の音から來るものであらう。否、秋も半ば過であるから、涼しさといふ感じは通り越して、うすら寒い感じである。「闇のうすら寒さ」といふやうなものがあるのなら、それはきつとこの蟲の音から起るのであらう。

ふと聞くと、後の床の間の壁の所に當つても蟲の音がする。天井の方に當つても蟲の音がする。床の下に當つても同様に蟲の音が聞える。今まで庭ばかりと思つてゐたのは間違であつて、自分を取圍んで四方から蟲の音が聞えるのである。よくよく聴くと、聲高い一つの蟲

が天井の隅の方で鳴き始める。さうするとそれに負けまいとして、同じ高音が床の下から聞える。今まで庭に鳴いてゐた蟲の聲の中にも、一際高いのが聞え始めて、天井や床の下の音にはりあふもののやうに見える。

じつと闇を見つめてゐると、それ等の蟲の音色が闇の中に明らかに見えるやうな心持がする。蟲の音色が見えるといふのは變なやうではあるが、ちんちりんと鳴くその鳴聲は、いかにも透明な音色であつて、闇の中にその音色が明らかに見えるやうな心持がする。またりんりんと鳴く蟲の音も、同じやうに透明な音色である。その音色は、明らかにこゝもとにあるぞよと、いふ風に響く。

すいつちよ／＼といふ蟲の音も、同じ透明な響である。そのすいつちよ／＼と鳴くのは、こゝですよといふ風に明らかに響く。がちや／＼／＼と格段に強く騒がしく響くのは、蟲の中のあばれものででもあるやうに、他の蟲のかはいらしくもの哀れげであるのと違つて、どことなくのさばり出るやうな感じであるが、しかしそのうちに、また一種の哀れさが見える。この大ききのさばり出る蟲の音は、外の蟲の音から比べると格段に高く、こゝに私^が鳴いてゐますといふ風に、明らかに看取せられる。さうしてそれ等の諸音が、際立つて大きいことから、つぶ／＼とした小さいのに至るまで、幾百千となく錯綜して響く。

この音色のをさになり、綾になり、もつれ、ほどけ、巻き返し繰り返しするさまが手に取るやうにはつきりと聞えて来る。それが丁度、闇に目があれば、眼前に明らかに見えるやうな心持がする。沓脱石の上を足で探ると、鼻緒のとれかゝつた庭下駄がある。それをつつかけて庭に降り立つて見る。足音を立てて庭の道に降りると、此方の叢の蟲は少し音をひそめる。が、彼方の叢の蟲は平氣で鳴いてゐる。暫くそこに佇んでゐると、もう大丈夫だ。と、心を許したもののやうに、すぐまた蟲の音は高まつて来る。また二三步歩くと、その邊の叢は少しひそみ音になつて、五六歩、七八歩と歩くに連れて、同じやうなことを

繰り返す。もう最前の叢の所の蟲は、平氣で高音を張りあげて鳴いてゐる。今音をひそめた蟲も、我が足音が行き過ぎると、すぐ高音になつて鳴く。最前縁に腰かけてゐる時分も、なほ床の間や、天井や、床下に鳴く蟲の音もあつて、恰も蟲の音の中にあるやうに覺えたが、今こゝに來て庭の眞中に立つて見ると、愈蟲の音のたゞ中にあるやうな心持がする。

この時、どことなくほの白くなつて來たことに氣がつく。もうそろ／＼と下弦の月の出る頃であるから、今月白が揚る頃であらうと思ふ。さういへば、草花に置いてゐる露の玉が、少しづつ光つて來るやうな心持がする。

今まで闇の中にたゞ黒く叢のあることを知つたばかりであつたが、それが萩の叢であり、紫苑の叢であり、薄の叢であり、桔梗の叢であり、をみなへしの叢であることが、



(筆文景村松) 圖 蟲 草 秋

漸くにしてわかりかける。萩の圓く枝垂れてゐる先が、地を摩つて暫く伸びて、ぴんとその尖のはね上つてゐる

摩
磨

様子などが、だん／＼と明らかになつて来る。秋風が来て、その叢に吹き當てると、暫くはたゆたふやうにしてゐるが、やがて二つに割れて、その風をじつとこの萩に支へてゐて、その風の力が弱ると、ざわ／＼と音がして、再び元のやうに圓く枝垂れた形に戻る。こんなこともよく見えるやうになつて来る。やがて萩の花の紅い白いいふことも、見分がつくやうになつて来る。紫苑の丈高い莖の先に、一輪づつ花をつけてゐる様子も明瞭になる。その紫苑の葉の莖の根元から伸びてゐるさまが、夜目にも力強く見える。をみなへしの黄色くもの哀れげに咲き満ちてゐるさまも見える。桔梗の花はとりつくるふ

術も知らぬもののやうに、かたくなな人の如く規則正しく花をつけてゐる。その有様も手に取るやうに見える。月はやがて我等の目に入るあたりまで登つて来た。下弦の月といつても、その弓は可なり引絞つた形である。空には一點の雲もないので、今は月光は隈なく庭の面を照らす。先に闇の中にこの庭を見つめた時の感じとすつかり違つて、今はもう庭のたゞずまひが残らず目に入るやうになつた。

ふと氣がついて見ると、やはり蟲の音は盛んに聞えてゐるのであるが、どうしたものか、かく目に庭の景色を明らかに見るやうになつてからは、その蟲の音は前ほど明

らかに聞えぬやうな心持がする。萩の叢を吹く風は、その後たび／＼同じやうな姿を繰り返すのであるが、その萩の叢の風に揺られるさまが、明らかに見えれば見える程、蟲の鳴聲が「朧げ」になつて行くやうな心持がする。くつわ蟲は相變らず聲高くがちや／＼と鳴きたててゐるが、それでも明るい月の下では、哀れにか細い音に聞える。

私は再び竹縁に来て腰をおろして、庭の面を眺める。萩の叢・紫苑・桔梗をみなへしなどの叢には、一面に露が降りて、きら／＼と光つてゐるさまが、手に取るやうに見える。その露の一つ／＼に光るさまは、ちやうど最前闇の

中に蟲の音を聞いた時、その蟲の音が一つ／＼に透明な音色に見えたやうに、その露の玉はいち／＼透明に揺れ動く。蟲の音の方は今は朧げになつて、最前のやうな透明な光を見せることはできぬが、それとなり代つて、今は露の玉が一つ／＼に光つて、眼前の葉先に揺いでゐる。かの床の間や、天井や、床下に聞えてゐた蟲の音も、今はどうやら止んでしまつたやうだ。月光は少し破れた軒端から疊の上に光を落し、床の下をも明るく照らしてゐる。私は秋草におく露の玉の風に揺ぐたびに、大きなかたまりになつて、それが一つ／＼に光つてゐる光景に眼を見張つて、再び蟲の音に耳を傾けた。

(「女性」に據る)

國木田獨歩
名は哲夫、小説家。
千葉縣の人。明治
四十一年歿、年三
十八。

一九 武藏野

國木田獨歩

武藏野を散歩する人は、路に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へ行けば、必ずそこに、見るべき、聞くべき、感ずべき獲物がある。武藏野の美は、ただその縦横に通ずる數千條の路を、當もなく歩くことに由つて始めて獲られる。春夏・秋冬・朝・晝・夕・夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たゞこの路をぶらぶら歩いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨處に吾等を満足させるものがある。これが實にまた、武藏野第一の特色だらうと、自分はしみじみ感じてゐる。武藏野を

那須野
栃木縣那須山麓の
廣野。

除いて、日本にこんな處が何處にあるか。北海道の原野には無論のこと、那須野にもない。その外何處にあるか。林と野とがかくもよく入り亂れて、生活と自然とがこのやうに密接して居る處が何處にあるか。武藏野にかゝる特殊の路のあるのは、實にこの故である。

されば、君若し一の小徑を歩き、忽ち三條に分るゝ處に出たら、困るに及ばない。君の杖を立てて倒れた方に行き給へ。或はその路が君を小さな林に導く。林の中ごろに到つて又二つに分れたら、その小なる路を選んで見給へ。或はその路が君を妙な處に導く。そこは林の奥の古い墓地で、苔むす墓が四つ五つ並んで、その前に少し



ばかりの空地があつて、その横の方に女郎花などの咲いて居ることもあらう。頭の上の梢で小鳥が鳴いて居たら、君の幸福である。すぐ引返して左の路を進んで見給へ。忽ち林が盡きて、君の前に見渡しの廣い野が開ける。足元から少しだら／＼下りになり、萱が一面に生え、尾花の末が日に光つて居る。萱原の先が畑で、畑の先に背の低い林が一叢繁り、その林の上に遠い杉の小森が見え、地平線の上に淡々しい雲が集つて居て、雲の色にまがひさうな連山がその間に少しづつ見える。小春の日の光がのどかに照り、小氣味よい風がそよ／＼と吹く。若し萱原の方へ下りてゆくと、今まで見えた廣い景色が悉く隠

れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく細長い池が、萱原と林との間に隠れて居たのを發見する。水は清く澄んで、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮やかに映してゐる。水のほとりには枯蘆が少しばかり生えてゐる。この池のほとりの徑を暫く行くと、又二つに分れる。右に行けば林、左に行けば坂、君は必ず坂を登るだらう。兎角武藏野を散歩するのに、高い處／＼と選びたくなるのは、何とかして廣い眺望を求めるところからで、それでその望は容易に達せられない。見下すやうな眺望は決して出来ない。それは初から諦めたがいゝ。

若し君、何かの必要で路を尋ねたく思ふなら、畑の真中

に居る農夫に聞き給へ。農夫が四十以上の人であつたら、大聲をあげて尋ねて見給へ。驚いて此方を向き、大聲で教へてくれるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲で聞き給へ。若し若者であつたら、帽子を取つて慇懃まごまごに問ひ給へ。鷹揚に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。

教へられた道を行くと、道がまた二つに分れる。教へられた方の路は、餘りに小さくて少し變だと思つても、その通りに行き給へ。突然農家の庭先に出るだらう。果して變だと驚いてはいけな。その時農家で尋ねて見給へ。「門を出るとすぐ往來ですよ。」と、すげなく答へる

だらう。農家の門を外に出て見ると、果して見覚えのある往來。成程これが近路だなど、思はず微笑をもらす。その時始めて教へてくれた人の有難さがわかるだらう。眞直ぐな路で、兩側共十分に黄葉した林が四五町も續く處に出ることがある。この路を獨り靜かに歩むのは、どんなに樂しからう。右側の林の頂には夕日が鮮やかに輝いて居る。折々落葉の音が聞える許り、四邊あたりはしんとして如何にも淋しい。前にも後にも人影見えず、誰にも遇はない。若しそれが木の葉の落ち盡くした頃ならば、路は落葉に埋もれて、一足毎にがさ／＼と音がする。林は奥まで見すかされ、梢の先は針の如く細く蒼空を指

してゐる。尙更人に遇はない。愈淋しい。落葉を蹈む
 自分の足音許り高く、時々慌しく飛び去る山鳩の羽音に
 驚かされるばかり。
 同じ路を引返して歸るのは愚である。迷つたところが
 今の武藏野に過ぎない。まさかに行き暮れて困るこ
 ともあるまい。歸りもやはり凡その方角をきめて、別な
 路を當もなく歩くが妙。さうすると、思はず落日の美觀
 を得ることがある。日は富士の背に落ちんとして未だ
 全く落ちず、富士の中腹に群がる雲は黄金色に染まつて、
 見るが中に様々の形に變ずる。連山の頂は、白銀の鎖の
 やうな雪が次第に遠く北に走つて、終りは暗澹たる雲の

うちに没してしまふ。

日が落ちる。野は風が強く吹く。林は鳴る。武藏野
 は暮れんとする。寒さが身に沁む。その時は路を急ぎ
 給へ。顧みて思はず新月が枯木の梢の横に寒い光を放
 つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹き落しさ
 うである。突然又野に出る。君はその時、

山は暮れて野は黄昏の薄かな
 の名句を思ひ出すだらう。

(武藏野)

山は暮れて
 與謝蕪村の句。

正岡子規
名は常規。俳人。
歌人。松山市の人。
明治三十五年歿。
年三十六。
國府津
神奈川県足柄下郡
の町。

湯本
足柄下郡の町。

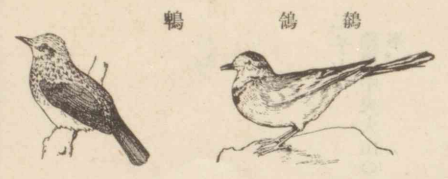
二〇 箱根路

正岡子規

國府津・小田原は一所懸命に駈けぬけて、はや箱根路へ
かゝれば、何となく行脚の心の中嬉しく、秋の短き日は全
く暮れながら、谷川の音耳を洗うて、煙霧模糊の間に、白露
光あり。
白露の中にほつかり夜の山
湯本に辿り着けば、一人のをのこ袖をひかへて、「いざ給
へ、善き宿まゐらせん。」といふ。引かるゝまゝに行けば、
いとむさくろしき家なり。前日來の病もまだ全くは癒
えぬに、この旅亭に一夜の寒氣を受けんこと氣遣はしく、

やゝ落膽したるが、まゝよ、これこそ風流のはじめ、行脚の
眞面目なれ。

次の日まだき起き出でつ。板屋根の上の滴るばかり
に沾ひたるは、昨夜の雲のやどりにやあらん。よもすが
ら雨と聽きしも、笈の音、谷川の響なりしものをと、はや山
深き心地ぞすなる。けふは一天晴渡りて瀧の水朝日に
きらつくに、鶴鴿の小岩づたひに飛びありくは、逃ぐるに
やあらん、はたこなたへとしるべするにやあらんと、草鞋
のはこび自ら軽らかに、箱根街道のぼり行けば、鴨の聲左
右にかしましく、
我がなりを見かけて鴨の啼くらしき



病みつかれたる身の、一足のぼりては一息ほつとつき、一阪のぼりては巖端に尻をやすむ。駕籠昇の頻りに駕籠をすゝむるを耳にもかけず、

二子山
箱根中央火山の一
峯。

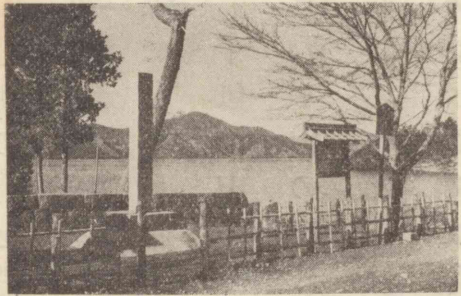
山路の菊野菊ともまた違ひけり。谷に臨めなど吟じつゝ行けば、はや二子山鼻先に近し。谷に臨めるかたばかりの茶屋に腰掛くれば、秋に枯れたる婆様の挨拶、何となく物寂びて面白く覺ゆ。見あぐれば千仞の谷間より木を負うており來る樵夫二人三人のそりくともものもえいはで、汗を滴らすさまいとあはれなり。樵夫も馬子も皆足を茶屋にやすむれば、それくにい

元箱根
足柄下郡元箱根
村。

くひぜ

名物ありやと問へば、力餅といふものなりとて、大きな餅の焼きたるを、二つ三つ盆に盛り來る。力餅の力を借りて登ること一里餘。杉樅の大道を夾み、元箱根の一村目の下に見えて、秋さびたるけしき仙源に入りたるが如し。

千仞の山嶺を攀ぢ、幾片の白雲を踏みくだきて登り着きたる山の頂に、鏡を磨ぎ出せる蘆の湖を見そめし時の心ひろさよ。餘りの絶景に、恍惚として立ちもえ去らず、木のくひぜに坐して、つくぐと見れば、山更にしんくとして、風吹かねども、冷氣冬の如く足もとよりのぼりて、腦天に沁みわたる心地なり。波の上に飛びかふ鶴鴿は、



箱根の關址

忽ち來り忽ち去る。秋風に吹きなやまされて、力なく水にすれつあがりつ、胡蝶のひらくと舞ひ出でたる、箱根の頂とも知らずてや、いと心づよし。遙かの空に白雲とのみ見つるが上に、兀然として現れ出でたる富士、ここからもなほ二千仞はあるべしと思ふに、更にその影を幾許の深さに沈めて、さゞ波にちゞめ寄せられたる、またなくをかし。

箱根驛
足柄下郡箱根町。

箱根驛にて午餉したゝむるに皿の上に尺にも近かるべき魚一尾あり。主人誇りかに、こは湖水の産にして、こ

この名物なりといふ。名を問へば、赤腹となん答へける。面白き魚の名なりけり。これより山を下るに、見渡すかぎり皆薄なり。箱根の關はいづちなりけんと思ふものから、問ふに人なく、探るに跡なし。

二十餘年前までは金紋先箱の行列整々として、烏毛片鎌など威勢よく振立てく、行きかひし街道の繁昌も、あはれ物の本にのみ残りて、草刈るわらべの小道一筋を除きて、外は草の生ひ出でぬ處もなく、僅かに行列のおもかげを薄の穂にとゞめたり。

槍立てて通る人なし花薄

(子規全集、十卷、旅の旅の旅)

二十餘年前
此の文は明治二十
二年に書いたもの
である。

五十嵐 力

文學博士。早稻田
大學教授。國文學
者。米澤市の人。
明治七年生。

稗田杉屏

本名三平。

海上胤平

歌人。大正五年歿、
年八十七。

牛ひきかへる云々
「賤の男が牛ひきか
へるうしろ影見る
見る消えて野は暮
れにけり。」
(小出 繁)

二 牛を追ふ話

五十嵐 力

老農友稗田杉屏氏の話である。

日本の古言には簡単な裡に實に奥深い眞理を含んだ
ものがあるものですね。

いつぞや——もう二十年にもなりませうか——海上

胤平たねひらといふ歌人が、某歌人の歌に、「牛ひきかへる云々。」と

あつたのを答めて、

「外國は知らず、我が國では、昔から牛には『追ふ』といひ來
つたものであるのに、『牛をひく』といふのは落着かない
詞遣ひだ。」といつたのがありました。當時私はそれを

見て、「歌人なんて暇つぶしに下らん事をいつて楽しんで
ゐるものだ。」と思つて馬鹿にしてゐましたが、その後十
數年経つて、はつと思ひ當つたことがありましたよ。そ
れは斯ういふ譯です。

板橋
東京市板橋區にあ
る。

或日牛を一匹板橋まで送つてやる用があつて、一人の
男に預けて出してやりましたが、程なく走つて來て、

「乞食橋の向ふまで行くと、牛が坐り込んで、どうしても
動かなくなりました。」

といふのです。

「意氣地のない弱蟲だ。それぢや、お前が行つて手傳つ
てやれ。」

といつて、小力のある他の男を附けてやりましたが、しばらくすると、それが又歸つて来て、

「二人でも、どうしても立ちません。」

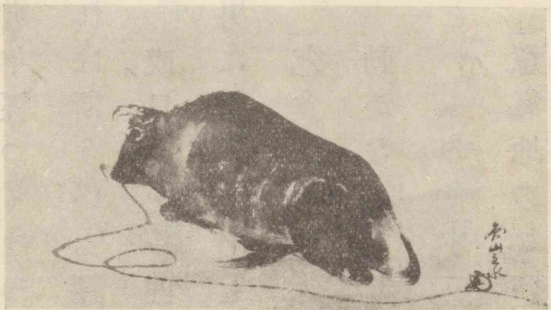
と申しました。

「馬鹿な奴だ、二人掛りで牛一匹動かせない奴があるか。それぢや五平、お前行つてやれ。」

と申しますと、五平は、

「情ない奴だな。それぢや、おれが一つ立たせてやらうか。」

などといつて、威勢よく出かけて行きましたが、しばらく



牛 臥 (圓山應舉筆)

すると、それもまた歸つて来て、

「旦那どうしても動きませんよ。今日はどうしたんですかなあ、打つても、叩いても、引張つても、だまして、一寸も利きませんや。」

と申しました。私は、

「をかしい事だ。しかしおれが行けば、どうにかなるだらう。」

と、怪しみながら、動物に對する飼主の威光と、男どもには多少優つた一日の長とを頼みにして、急いで行つて見ますと、なる程、牛の奴が宍戸邸(今の傷兵院)の裏門の前に大磐石と腰を据ゑて居り、まはりには眞黒に人だかりがし

てゐます。それから私は三人の男に手傳はせて鞭うつたり、あやしたり、いろ／＼工夫をして見ましたが、どうしても一寸も動かす事が出来ません。

困りぬいて呆然として居りますと、人だかりの中に、半纏を着て股引をはいた馬方らしい六十恰好の老爺さんが居りましたが、

「旦那、それぢや動きませうまいよ。私が一つやつて見ませうか。」

といつてくれました。

「それは有難い、是非に。」

といつて、懇に頼みますと老爺さんは私の手から鼻綱を

取つて、靜かに牛の右側に立ちましたが、右の手に持った綱を伸して、牛の尻邊しりべたを軽く打ちながら、

「しつ／＼。」

と申しますと、大磐石の牛が忽ち一身振ひして、むつくりと起き上りました。それから老爺さんは、後の方に立つて尻を打ちつゝ、二三度圓く引廻しましたが、やがて三四十間追つて行つて、

「さあかうして後から追つていらつしやい。もう大丈夫です。」

といつて綱を渡してくれました。

私は厚く禮を述べて別れましたが、此の時電光のやう

に私の頭に浮かんで来たのは、例の海上氏のいはれた、牛には「追ふ。」といふ我が古言でありました。私は一向古學に不案内ですが、古い大和言葉の中には、いくらかもかういふ風に、祖先が幾百年の経験を結晶させて、三四字の中に不動の眞理を疊み込んだのがあることでありませう。言葉の味はひななどといふものは、實にえらいものですね。

私は老農友の話をば、賈島が推敲の話よりも、應舉が猪の話よりも、觀世太夫が木賊刈の話よりも、フローベルが一語説よりも、更に面白く、更に興味深く思ひ、もだすにはもだされずして備忘することにした。

(尺重 穂)

賈島

支那唐代の詩人。

應舉

徳川時代の畫家。

觀世太夫

享保時代の能役者。

木賊刈

謡曲の名。

フローベル

佛國の小説家(西紀八三一—一八〇〇)。

北原白秋

二十九頁頭註参照。

二三 稗草の穂

北原白秋

おのづからうらさびしくぞなりにける稗草の穂のそよぐを見れば

新しく障子張りつつ茶の花もやがて咲かなとふと思ひたり

稗草にをりふし紅くそよめくは水引草か交りたるらし

ひとつひとつ目につく庭の草の穂の 絮毛は白しそよ
がぬぞなき

ながれ来て宙にとどまる赤蜻蛉唐黍の花の咲き揃ふ
うへを (花 穂)

前 田 夕 暮

裏富士の巨おほきななる影野におちてゆふべはるばる秋風
のふく

行けど行けど玉蜀黍たまもろこしの穂の光富士あらはにも夕焼し
たり

前田夕暮
名は洋造。歌人。
神奈川縣の人。明
治十六年生。

ほのぼのと匂ひぬくとし秋草のなかをながるる朝の
こぼれ湯

おくり來し菰こもづつみとけば新葱にほひのにほひしたしもふ
るさとの葱

ふるさとはつめたき土のにほひしてこほろぎのなく
うす月夜かも

秋の夜は土間におかれし泥甘藷どろいものなかにてなけりこ
ほろぎ一つ (原 生 林)

徳富蘇峰

名は猪一郎。思想評論家。貴族院議員。熊本縣の人。文久三年（三五三）生。

ドーヴァー海峡
ヨーロッパ大陸と
英國との間にある
海峡。

二三 國風と家風

徳富蘇峰

封建時代にありては、わづかに一川を隔て一山を離れ
ても、その人情風俗頓に相反するものありき。今日の歐
洲に於ては、列國の國境犬牙相交はれど、一たび境を越ゆ
れば率然として別國の感を起し來る。英佛兩國がドー
ヴァーの海峡を隔つるのみにて、大は國家の政體より、小は
一家生活の狀態に至るまで、相同じからざるが如きは固
より怪しむに足らざるなり。凡そ國風は、その國の歴史
によりておのづから出で來りたるものにして、一朝一夕
に成りたるものにあらず。されば、國風は國風として、こ

概観

れを認識するの外あるべからず。他國の風を見て濫みだりに
これを羨望したりとて、不自然なる模倣は、到底永續すべ
きものならず。寧ろ各、その立脚地を明らかにし、善きも
のはこれを發達せしめ、善からざるものはこれを矯正す
るに若かざるなり。
家風も亦此くの如し。家は一箇の小國なり。いづれ
の家にも、おのづからその家風なきはあらず。而して、そ
の家風は、概ね祖先より傳はれるものにして、一家の遺産
として、これより重要なるものあるべからず。たとひ、新
興の家にて、家あれば人あり、人あれば祖先あり。その
源に溯り來れば、おのづから一片の歴史なきこと能はず。

燥—噪

歴史の流るゝ所、これ、家風の生ずる所なり。
 人、國風の重んずべきことを解せば、家風の重んずべきも、亦これを解せざるべからず。しかも、動もすれば、眼中家なく、唯當座の成り行きに任せて、傳家の遺風を悉く蹂躪し去り、徒らに新様を誇りて満足する者あるは、抑、何の心ぞや。家風なき家庭は旅舎と何ぞ擇ばん。否、旅舎ならば、旅舎としてなほ忍ぶを得べし。家庭を以て旅舎と爲すに至りては、乾燥無味も亦甚だしからずや。
 國にも新國あり、家にも新家あり。新家可ならざるに非ず、たゞ新家たりとも、それ相應の家風は扶植したく思ふなり。ましてや、舊家に於て、その祖先より、連綿として

相續し來りたる家風は、苟も事に害なき限りこれを保存し、その善且美なるものは特にこれを尊重し、その子弟も亦この家風を守りて、家聲を失墜せざることを期せざるべからず。吾人は源平時代の勇士等が、自ら祖先何某の後胤と名のりて戦場に馳驅したるを見、そゞろにその心根のゆかしきを懷はざる能はざるなり。

芥川龍之介
小説家。東京市の
人。昭和二年歿。
年三十六。

小田原熱海



二四 トロッコ

芥川龍之介

小田原熱海間に、輕便鐵道敷設の工事が始つたのは、良平の八つの年だつた。良平は毎日村外れへ、その工事を



見物に行つた。工事を——と
いつた處が、唯トロッコで土を運
搬する——それが面白さに見
介之龍川芥
介之龍川芥
介之龍川芥

土を積んだ後に佇んでゐる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走つて來る。煽るやうに車臺が動い

たり、土工の半纏の裾がひらついたり、細い線路がしなつたり——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思ふ事がある。せめては一度でも土工と一しよに、トロッコへ乗りたいと思ふ事もある。トロッコは村外れの平地へ來ると、自然と其處にとまつてしまふ。と同時に土工たちは、身輕にトロッコを飛び降りるが早いか、その線路の終點へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し——もと來た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さへ出來たらと思ふのである。
或夕方——それは二月の初旬だつた。良平は二つ下

の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行つた。トロッコは泥だらけになつた儘、薄明るい中に並んでゐる。が、その外は何處を見ても、土工たちの姿は見えなかつた。三人の子供は恐る／＼、一番端にあるトロッコを押した。トロッコは三人の力が揃ふと、突然ごろりと車輪をまはした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかつた。ごろり／＼、トロッコはさういふ音と共に、三人の手に押されながら、そろ／＼線路を登つて行つた。その内に彼は十間程來ると、線路の勾配が急になり出した。トロッコも三人の力ではいくら押しても、動かなく

なつた。どうかすると、車と一しよに押戻されさうにもなる事がある。良平はもう好いと思つたから、年下の二人に相圖をした。

「さあ、乗らう！」

彼等は一度手をはなすと、トロッコの上へ飛び乗つた。トロッコは最初徐に、それから見る／＼勢よく、一息に線路を下り出した。その途端に、つき當りの風景は忽ち兩側に分れるやうに、ずん／＼目の前へ展開して來る。顔に當る薄暮の風、足の下に躍るトロッコの動搖——良平は殆ど有頂天になつた。しかしトロッコは二三分の後、もとの終點に止つてゐた。

「さあ、もう一度押すんだ。」

良平は年下の二人と一しよに、又トロッコを押上げにか
かつた。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後には、
誰かの足音が聞え出した。のみならず、それは聞え出し
たと思ふと、急にかう云ふどなり聲に變つた。

「この野郎！誰に斷つてトロに觸つた！」

其處には古い印半纏に、季節外れの麥藁帽をかぶつた、
脊の高い土工が佇んでゐる。——さう云ふ姿が目には
ひつた時、良平は年下の二人と一しよに、五六間も逃げ出
してゐた。——それきり良平は使の歸りに、人氣のない
工事場のトロッコを見ても、二度と乗つて見ようと思つた

事はなかつた。唯その時の土工の姿は、何時までも良平
の頭、の何處かにはつきり記憶に残つてゐた。

その後十日餘りたつてから、良平は又たつた一人、午過
の工事場に佇みながら、トロッコの來るのを眺めてゐた。
すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが
一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登つて來た。こ
のトロッコを押してゐるのは、二人とも若い男だつた。良
平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いやうな氣がし
た。

「この人たちならば叱られない。」——彼はさう思ひなが
ら、トロッコの側へ驅けて行つた。

「をぢさん。押してやらうか？」

その中の一人——縞のシャツを着てゐる男は、俯向きにトロッコを押した儘、思つた通り快い返事をした。

「お、押してくれ。」

良平は二人の間にはひると、力一杯押始めた。

「お前は中々力があるな。」

他の一人——耳に巻煙草を挟んだ男も、かう良平を褒めてくれた。

その内に線路の勾配は、だん／＼樂になり始めた。「もう押さなくとも好い。」——良平は今にもいはれるかと内心氣がかりでならなかつた。が、若い二人の土工は、前よ

りも腰を起したぎり、黙々と車を押續けてゐた。良平はたう、とう堪へ切れずに、怯づく／＼こんな事を尋ねて見た。「何時までも押してゐて好い？」

「好いとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ。」と思つた。

五六丁餘り押續けたら、線路はもう一度急勾配になつた。其處には兩側の蜜柑畑に、黄色い實がいくつも目を受けてゐる。

「登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから。」

——良平はそんなことを考へながら、全身でトロッコを押

すやうにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。縞のシャツを着てゐる男は、良平に「おい乗れ。」といった。良平はすぐに飛び乗った。トロッコは三人が乗移ると同時に、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひたひたに線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずっと好い。」——良平は羽織に風を孕ませながら、當り前の事を考へた。「行きに押す所が多ければ、歸りに又乗る所が多い。」——さうも考へたりした。

竹藪のある所へ來ると、トロッコは靜かに走るのを止めた。三人は又前のやうに、重いトロッコを押始めた。竹藪

は何時か雜木林になった。爪先上りの處々には、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまつてゐる場所もあつた。その路をやつと登り切つたら、今度は高い崖のむかふに、廣々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、餘り遠く來すぎた事が急にはつきりと感じられた。

三人は又トロッコへ乗った。車は海を右にしなが、雜木の枝の下を走つて行つた。しかし良平はさつきのやうに、面白い氣持にはなれなかつた。「もう歸つてくれれば好い。」——彼はさうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も歸れない事は、勿論彼にもわかり切つてゐた。

その次に車のとまつたのは、切り崩した山を背負つてゐる藁屋根の茶店の前だつた。二人の土工はその店へはひると、乳呑兒をおぶつたおかみさんを相手に、悠々と茶などを飲み始めた。良平は獨りいらくしなから、トロッコのまはりをまはつて見た。トロッコには岩乗な車臺の板に、跳ねかへつた泥が乾いてゐた。

少時の後、茶店を出て來しなに、巻煙草を耳に挟んだ男は、(その時はもう挟んでゐなかつたが)、トロッコの側にある良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「有難う。」といつた。が、すぐに冷淡にしては相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取繕ふやうに、包

み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂がしみてゐた。

三人はトロッコを押しながら、緩い傾斜を登つて行つた。良平は車に手をかけてゐても、心は外の事を考へてゐた。その坂をむかふへ下り切ると、同じやうな茶店があつた。土工たちがその中へはひつた後、良平はトロッコに腰をかけながら、歸る事ばかり氣にしてゐた。茶店の前には、花のさいた梅に西日の光が消えかゝつてゐる。「もう日が暮れる。」彼はさう考へると、ぼんやり腰かけてゐられなかつた。トロッコの車輪を蹴つて見たり、一人では動かないのを承知しながらうんくそれを押して見たり、

——そんな事に氣もちを紛らせてゐた。
處が土工たちは出て來ると、車の上の枕木に手をかけながら、無雜作に彼にかういつた。

「お前はもう歸んな、おれたちは今日はむかふ泊りだから。」

「あんまり歸りが遅くなると、お前の家でも心配するから。」

良平は一瞬間あつけにとられた。もう彼は暗くなる事、去年の暮、母と岩村まで來たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたつた一人歩いて歸らなければならぬ事、——さういふ事が一時にわかつたのである。

良平は殆ど泣きさうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いてゐる場合ではないと思つた。彼は若い二人の土工に取つて附けたやうな御辭儀をすると、どん／＼線路傳ひに走り出した。

良平は少時無我夢中に線路の側を走り續けた。その内に懷の菓子包みが邪魔になる事に氣がついたから、それを路側へ抛り出すついでに、板草履も其處へ脱ぎ捨ててしまつた。すると薄い足袋の裏へ、ぢかに小石が食ひこんだが、足だけは遙かに軽くなつた。彼は左に海を感じながら、急な坂路を驅け登つた。時々涙がこみ上げて來ると、自然に顔が歪んで來る。——それは無理に我慢し

せ
る。

ても、鼻だけは絶えずくうくう鳴った。竹藪の側を駆けぬけると、夕焼のした日金山の空も、もうほてりが消えかゝつてゐた。良平は愈氣が氣でなかつた。往きと返りと變るせゐか、景色の違ふのも不安だつた。すると今度は着物までも、汗の濡れ通つたのが氣になつたから、やはり必死に駆けつゞけたなり、羽織を路ばたへ脱いで捨てた。

蜜柑畑に来る頃には、あたりは暗くなる一方だつた。「命さへ助かれば——」良平はさう思ひながら、走つても、つまづいても走つて行つた。

やつと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えた時、良

平は一思ひに泣きたくなつた。しかしその時も、べそはかいたが、たうとう泣かずに駆けつゞけた。

彼の村へはひつて見ると、もう兩側の家々には電燈の光がさし合つてゐた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯氣の立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲んでゐる女衆や、畑から歸つて来る男衆は、良平が喘ぎく走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと聲をかけた。が、彼は無言の儘、雜貨屋だの、床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

かれの家の門口へ駆けこんだ時、良平はたうとう大聲に、わつと泣き出さずにはゐられなかつた。その泣聲は

彼の周圍へ一時に父や母を集らせた。殊に母は何かいひながら、良平の體を抱へるやうにした。が、良平は手足をもがきながら、睨り上げく泣きつづけた。その聲が餘り激しかつたせゐるか、近所の女衆も、三四人、薄暗い門口へ集つて來た。父母は勿論その人たちは、口々に彼の泣く譯を尋ねた。しかし彼は何といはれても、泣き立てるより外に仕方がなかつた。あの遠い路を驅通して來た。今までの心細さをふり返ると、いくら大聲に泣きつづけても、足りない氣もちに迫られながら――。

(芥川龍之介全集)

新制女子國語讀本 卷三終

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調查會發表、昭和六年五月修正) (千八百五十八字)

- | | | | |
|--------------|----------------|---------------|---------------|
| 【一】一丁七丈三上下不 | 儉價優【凡】元兄充兆兒 | 卷卽【尸】厄厘厚原厥 | 夏【夕】夕外多夜夢【大】 |
| 世丙並【一】中【二】丸主 | 先光克兌免兒【入】入内 | 【去】去參【又】及友反叔 | 大天太夫央失奇奉奏契 |
| 【二】之久乏乘【乙】乙九 | 全兩【八】八公六共兵具 | 取受【口】口古句叫召可 | 奔奢輿奪獎奮【女】女奴 |
| 乞也乳亂【丁】了事【三】 | 其典兼【冊】冊再【元】元 | 史右司各合吉同名后吏 | 好如妃妊妥妙妨妹妻姉 |
| 二五五井【亡】亡交京亭 | 【冬】冬冷涼准凌凍【凡】 | 吐向君吟否含呈吸吹告 | 始姑姓委姦姪姪姻姿威 |
| 亦【人】人仁仇今介仕他 | 凡【凶】凶出【刀】刀刃分 | 咸周味呼命和咽哀品員 | 娘娛娠娼婚婦婿媒嫁嫡 |
| 付代令以仰仲伴任伊伏 | 切刊刑列初判別利到制 | 哲唐唯唱商問啓善喉喜 | 嫌嬖【子】子字存孝季孤 |
| 伐休伯伴伺似位低佳佐 | 刷券刺刻則削前剛副剩 | 喪喫單嗣嘉器噴噉囑 | 孫學【宅】宅守安宏完宗 |
| 何余佛作伸使來佳例侍 | 割創劇劍劑【力】力功加 | 【囚】囚四回因困固國圍 | 官定宜客宣室宮害宴家 |
| 供依侮侯侵便係促俱俊 | 劣助努効勅勇勉動勸務 | 園圓圖團【土】土在地坂 | 容宿寄密富寒察寢寔審 |
| 俗保俠信修俳倭俸併倉 | 勝勞募勢勤勸勵【勸】 | 均坊坑坪垂型埋域城執 | 寫寬寶【寸】寸寺封射將 |
| 個倍倒候借假倣倣偏停 | 包【匕】匕化北【區】區【士】 | 培基堀堂堅堤堪報場塔 | 專尉尊尋對導【小】小少 |
| 健個偶倣倣備催働傳債 | 十千升午半卑卒卓協南 | 塗塵境墓屏增墨墮墮壁壇 | 尙【尗】尗就【尸】尺尼尾尿 |
| 傷傾僅像儵僞僧價儀億 | 博【卜】卜占【危】危却卵 | 壓壞壤【土】土壯壹壽【炙】 | 局居屆屈屋展層履屬 |

【山】山岡岩岳岸峙峯島
峽崇崎崩【川】川州巡集
【工】工左巧巨差【己】己
【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣【干】干
平年幸幹【幻】幼幾【床】
床序底店府度座庫庭庶
康廉廓廢廣廳【延】延廷
建廻【弄】弄弊【弋】弋式
【弓】弓弔引弟弱張強彈
【形】形彩影彰【役】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復徵徵德徹【心】心
必忍忍志忘忙忠快念怒
思怠急性怨怪怯恐恥恨
恩恭息悔悟悖患悲惟悼

情感惜惠惡情惱想愁愉
意思愛感慈態慕慘慢慎
慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戔】戔戎戰戲戴【戶】
戶戾房所扇【手】手才打
扱扶批承技抑投抗折抱
抵押披抽拂拍拒拓拔拘
拙招拜括拳拾持指振捕
捧描拾掃授掌排掛探探
控推揚接提換握揮搦揮
援損搖搜摘携摩撫擇擊
操擔據擬擴攝【支】支
【支】收改攻放政故敍敎
敏救敗敢散敬敵數數整
【文】文【斗】斗料斜【斤】

斤斥斬新斷斯【方】方施
旋族旗【旄】旄旣【日】日
且旨早旬旭昇昌明易昔
星春昭昨是映時晚晝普
景晴晶智暇暖暗暑暮暴
曆曇曜【目】目曲更書曹會
替最會【月】月有朋服朕
朗望朝期【木】木未末本
札朱机朽杉材村束柿杯
東松板枕林枚果枝枯架
柄某染柔查柅柱柳栗校
株根格栽桃案桐桑梅條
梨械棄棋棒棟森棺植楠
業極榮構概樂樓標樞模
樣樹橋機橫檄檢櫻欄權
【欠】欠欲款欺歌歌歌歡

【止】止正此步武歲歷歸
【歹】歹殊殉殖殘【歹】段
殺殿毀【母】母每毒【比】
比【毛】毛【氏】氏民【气】
氣【水】水水永汁求汗污
江池決汽沈沒沖沙汰河
沸油治沼沼沉泉泊法波
泣泥注泰泳洋洗津洪活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑浦淡淨淫深混清淺
添減淵渡溫測港渴湖湧
湯源準溢溶溺滅滋滑滯
滴滿漁漂漆漏演漕漕漢
漫漸潔潛湖澤激濁濃濕
濟濱瀧灣【火】火灰災炊
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熟熱燃燈燒營爆爐【爪】
爪爭爲爵【父】父【爻】爾
【片】片版牌【牙】牙【牛】
牛牧物性特犧【犬】犬犯
狀狂狩狹猛猶獄獨獲
獵獸獻【亥】亥率【玉】玉
王玩珍珠班現球理琴環
鹽【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畜畝略番畫異雷當疊
【疋】疋疎疑【疋】疫疫疾
病症痘瘡痲癩癬【火】登
發【白】白百的皆皇【皮】
皮【皿】皿盆益盛盜盟盡
監盤【目】目盲直相省眉

看真眠眼着睡督【矢】矢
知短【石】石砂砲破研硬
硯碁碎碑確磁磨礎【示】
示社祈祕祖祝神稟祭禁
禍福禦禮【禾】秀私秋科
秒租秩移稅程稚種稱稻
稿穀積穗穩【穴】穴究空
突窃窺窗窮【立】立章童
端鏡【竹】竹竿笑笛符第
筆等筋筒答策算管箱節
範築篤簡簿籍【米】米粉
粒粘粗粹精糖糞【糸】系
紀約紅紋納純紙級紛素
紡索紫累細紳紹紺終組
結絕絡給統絲絹經綠維
綱網綴綻綿緊緒線綠維

編綏緯練縛縣縫縮縱總
績繁織繕繪繭線繼續
【缶】缺【罔】罪置署罰罵
罷羅【羊】羊美羣義【羽】
羽翁翌習翼【老】老考者
【而】耐【耒】耕【耳】耳聖
聞聯聲職聽【聿】肅肇
【肉】肉肖肝股肥肩育肺
胃背胎胞胸胸能脊脈脊
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜
膝臆臆膺臟【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【目】與興舉舊【舌】舌舍
【舩】舞【舟】舟航般舵舶
船艦【良】良【色】色【艸】
芝花芽芳苑苗若苦英茂

茶草荒荷莊菊菌菓菜華
萬落葉著莽蒙蒸蕃蔓薄
藏藝藤藥【虺】虺虺處虛
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲
蠶蠻【血】血衆【行】行術
街衝衡衡【衣】衣表袞袞
袖被裁裂裏裕補裝裸製
複褒襲【西】西要覆【見】
見規視親覺覽觀【角】角
解觸【言】言訂計討訓託
記訟訪設許訴診詐詔評
詞詠試詩詰話詳誇誌認
誓誕誘語誡誤說課調談
請論諭諸諾謀諷諒講謝
謠謹謬證識譜警譯議護
譽讀變讓【谷】谷【豆】豆

豐【豕】豚象豪豫【貝】貝
 貞負財貧貨販賈責貯貳
 貴買貨費買賀質賄資賊
 賓賜賞賈賈賤賦質賴購
 贈贊【赤】赤【走】走赴起
 超越趣【足】足距跡路踊
 躍【身】身【車】車軌軍軒
 軟軸較載輕輦輪輯輪輿
 轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰
 農【毛】込迎近返迫迭述
 迷追迭送逃逆透逐途通

速造連週進逸遂遇遊運
 過道遠遠遙遶遠遠適遭
 遲遷選遺避遠邊邊【邑】
 邦邪邱郊郎郡部郵都鄉
 【酉】酌配酒酢酬酷酸醉
 醜醫【采】釋【里】里重野
 量【金】金釜針鈞鈍鈴鉛
 鉢銀銃銅銘銳鋒鋼錯錄
 錢鍋鎖鎖鏡鑄鐘鐵鑑鏞
 【長】長【門】門閉開閉
 閉閑關【阜】防附降限陞

院陣除陪陳陰陵陶陷陸
 陽隆隊階隔隙際障隣隨
 險隱【隹】隻雀雄雅集雇
 雌雙雜離難【雨】雨雪雲
 零雷電需震霜霧露靈
 【青】青靜【非】非【面】面
 【革】革靴【音】音響【頁】頁
 頂項順頓預頑領頭頻題
 額額顛顛類顧顯【風】風
 【飛】飛飜【食】食飢飲飯
 節養餓餘餅館餐【首】首

【香】香【馬】馬馳駁馱駐
 騎騰騷驅驗驚驛【骨】骨
 隨體【高】高【髟】髮【鬥】鬥
 鬪【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮
 鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
 【齒】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥
 【麻】麻【黃】黃【黑】黑默
 點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】齊
 齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】龜

注意

(一) 本表にない漢字は假名で書くこと (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、た
 だし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること (三) 代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞
 および助詞はなるべく假名で書くこと (四) 外來語は假名で書くこと。

たわし(束藁子)
 たわむ(撓)
 たわむに(撓)
 たわやか(嬋妍)
 たわやめ(手弱女)
 たわら(俵)
 はらわた(俵)
 ひわ(翹)
 ゆわう(疏黃)
 よわし(弱)

うゑ(飢・餓)
 うゑ(植)
 うゑき(植木)
 うゑごみ(前栽)
 ちゑ(智慧)
 え(兄)
 えと(兄弟)きのえ(甲)
 ひのえ(丙)つちのえ(戊)
 かのえ(庚)みづのえ(壬)
 え(枝)

をす(食・治)
 をち(遠)
 をちこち(遠近)
 をととし(一昨年)
 をととし(昨日)
 をとり(隔・媒鳥)
 をどる(踊・跳・躍)
 をの(斧)
 をのく(樵)
 をはる(冬・卒了)

なんぢ(汝)
 もみぢ(紅葉)
 なめくぢ(蛞蝓)
 みそぢ(三十)
 よそぢ(四十)
 いそぢ(五十)
 むそぢ(六十)

新制女子國語讀本	卷一	各金六十錢
卷九	各金六十錢	
卷十	各金五十九錢	

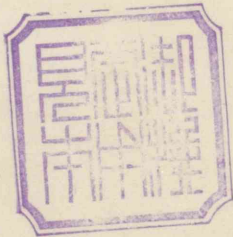
新制女子國語讀本

昭和十二年七月十九日 印刷
 昭和十二年七月廿五日 發行
 昭和十三年一月五日 修正再版印刷
 昭和十三年一月十日 修正再版發行

新制女子國語讀本

定價 卷一—卷九 各金六十錢
 卷十 各金五十九錢

不許複製



編者 安藤 正次

發行者 東條 操

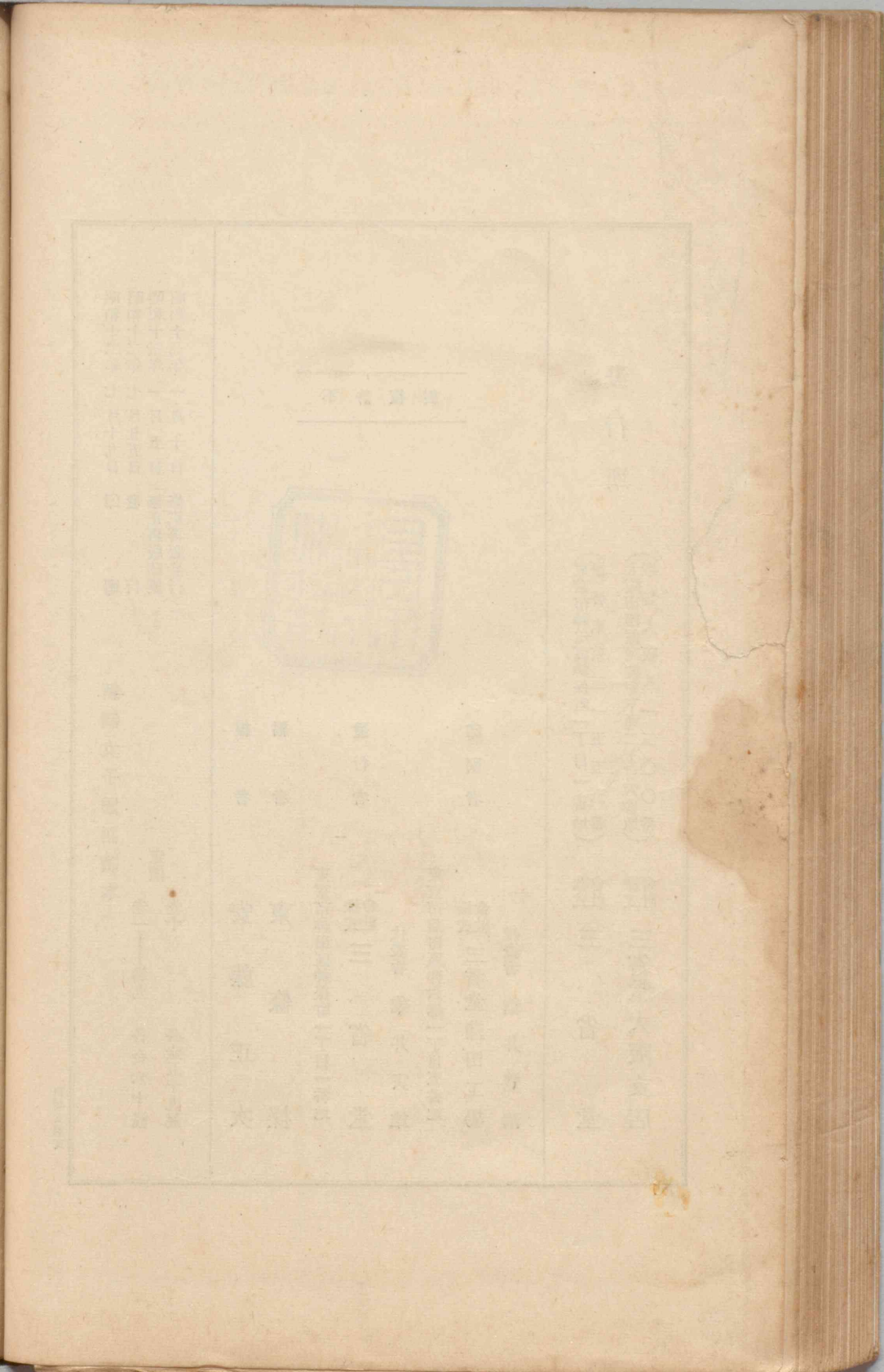
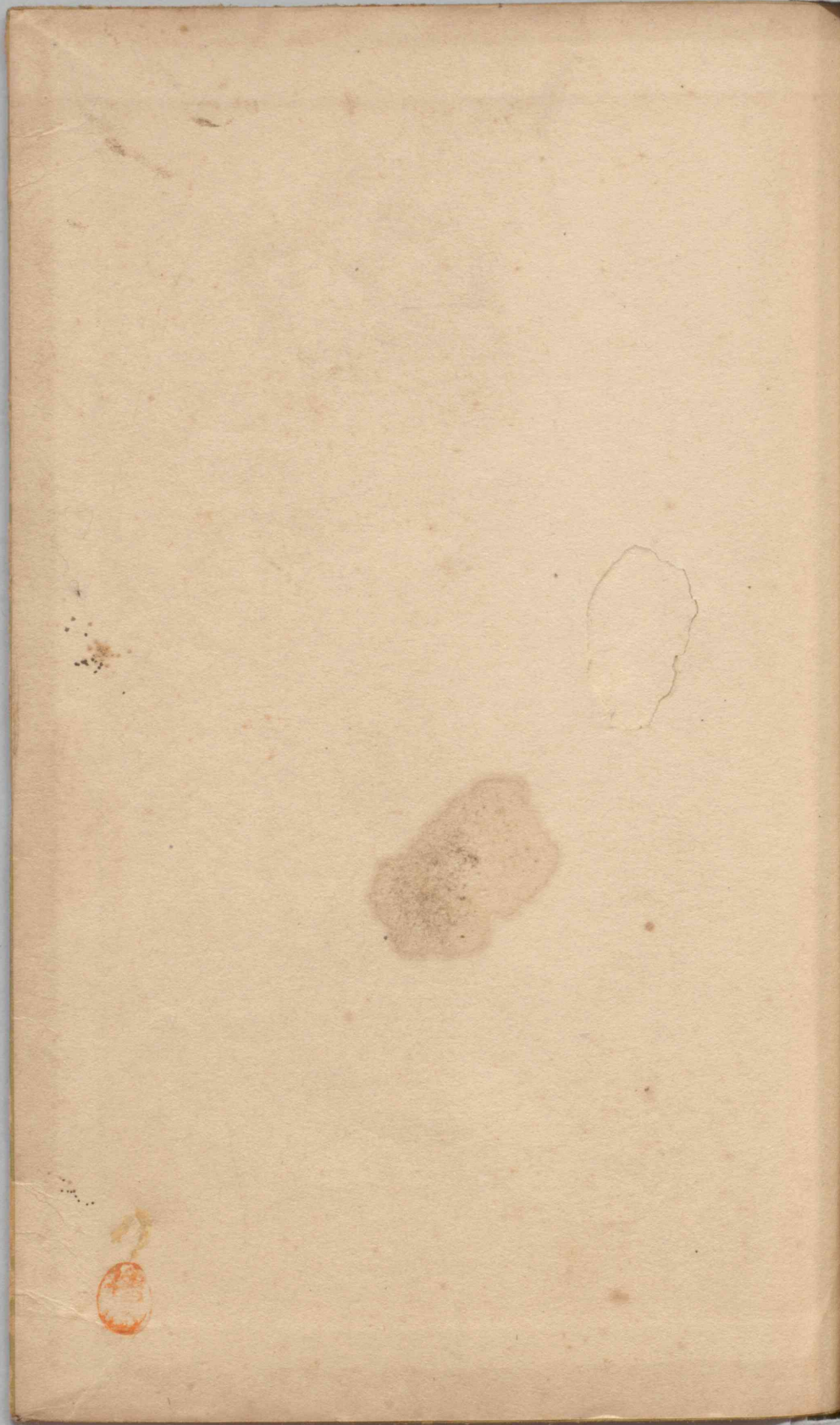
印刷者

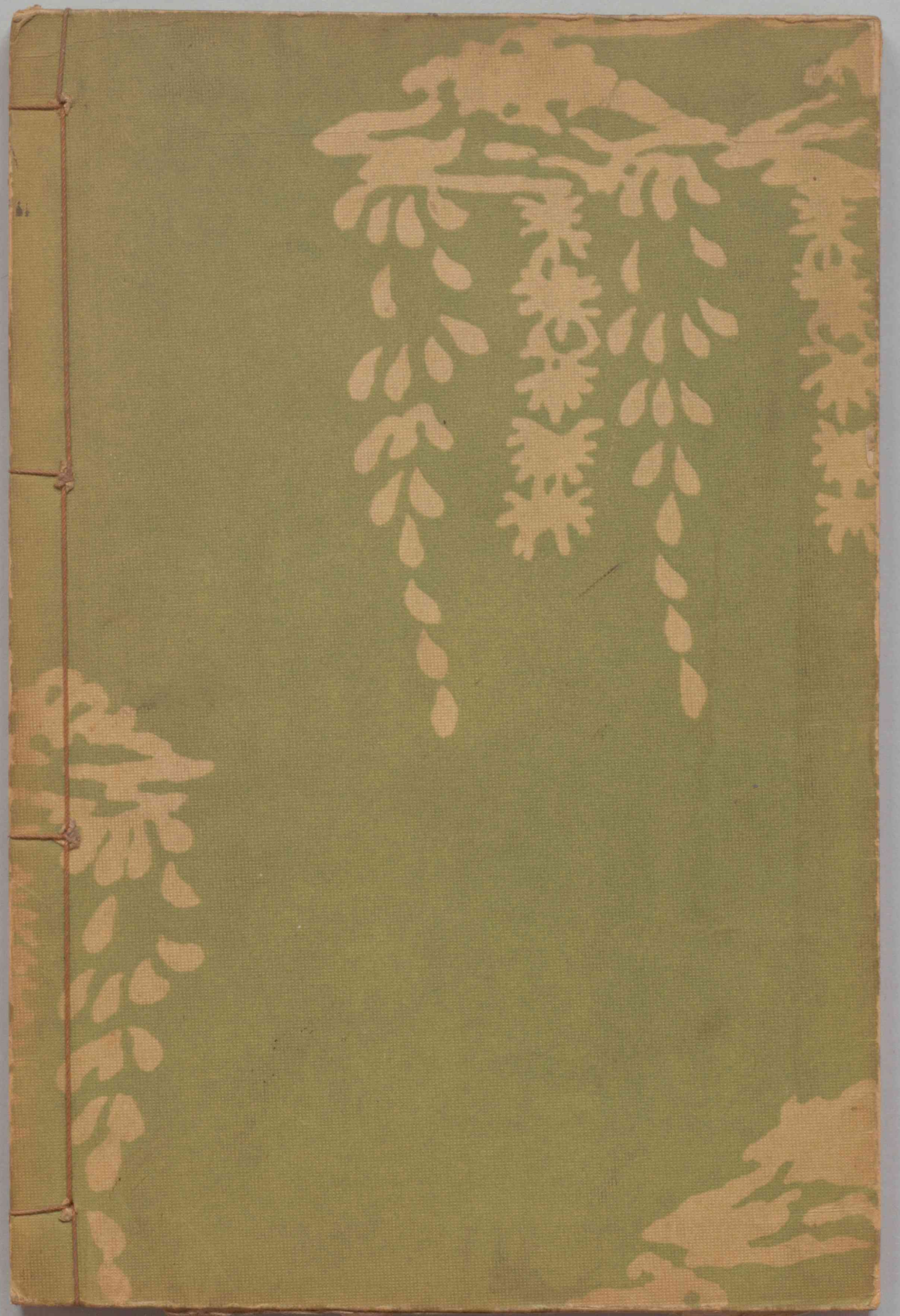
東京市神田區神保町一丁目一番地
 株式會社 三省堂
 代表者 龜井寅雄

東京市神田區神保町一丁目一番地
 (振替東京三一九五五番地)
 株式會社 三省堂

大阪府西區阿波座下通二丁目六番地
 (振替大阪八一三〇〇番地)
 株式會社 三省堂大阪支店

發行所







美味しくて

滋養になる!!

凍^ト麵^{メン}

